

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

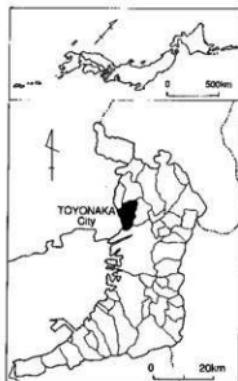
平成9(1997)年度

平成10(1998)年3月

豊中市教育委員会

豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成 9 (1997) 年度



平成 10 (1998) 年 3 月

豊中市教育委員会

序 文

豊中市は、大阪府の北西部に位置し、千里丘陵の緑と猪名川の流れなど自然に恵まれた環境に包まれた土地として、太古の昔より人々の生活が営まれてきました。その一方で、大都市大阪の周辺という立地から、ベッドタウンとしてあるいは交通の要衝として開発が進められてきました。

本書が報告する調査成果は、そうした観点から国ならびに大阪府の補助を受けて平成8・9年度事業として豊中市が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要です。8年度には穂積遺跡・曾根遺跡・岡町南遺跡、本年度はそれらの整理作業を行いました。穂積遺跡は、古くは「穂積式」として弥生土器の指標のひとつとなり、最近では連鉄式銅鏡を出土するなど全国的に著名な遺跡であり、新免遺跡は弥生時代の拠点集落として、あるいは須恵器生産に関わる集落遺跡として知られています。曾根遺跡も弥生時代・奈良時代の集落が存することで知られています。今回の調査でも、新たな資料と知見がこれらの遺跡につけ加わり、その重要性がいっそう認識されるに至りました。また、岡町南遺跡は、これまでほとんど調査が行われたことがなく、今回の調査でその性格の一端に触ることができました。

「緑豊かな生活文化都市」を標榜する豊中市としては、まちづくりを進める上で、先人から受け継いだふるさとの歴史と文化に寄せる期待が、今後ますます膨らんでいくことと存じます。本書が、そうしたまちづくりに少しでも寄与するところがあれば、これに過ぎたることはできません。

調査の実施にあたっては、土地所有者・工事関係者・近隣の住民の方々には、調査の重要性に対し深いご理解と多大なご協力を賜りました。篤くお礼申し上げます。また、大阪府ならびに関係諸機関には、ご指導とご配慮をいただきました。心から感謝いたしますとともに、今後も当市文化財行政にいっそうのご理解とご支援をお願いする次第です。

平成10年(1998年) 3月31日

豊中市教育委員会
教育長 栗原 有史

例　　言

1. 豊中市教育委員会では平成8年度国庫補助事業として曾根遺跡第6次調査・穂積遺跡第21次調査・岡町南遺跡第2次調査を下表の日程で行なった。それらの調査成果を、平成9年度国庫補助事業（総額1,000,000円、国庫50%、府費25%、市費25%）として整理した。本書はその成果を報告するものである。
2. 本年度事業は、平成9年4月1日から平成10年3月31日までの間、整理作業を実施した。
3. 発掘調査は、本市教育委員会社会教育課文化財保護係が実施した。詳細は、下表に記すところである。
4. 本書のうち、第Ⅰ章・第Ⅳ章は清家 章、第Ⅱ章は橋田正徳、第Ⅲ章は清水 篤が編集・執筆し、全体の編集は清家が行った。
5. 各挿図に掲載した方位表記のうち、M, N, は磁北、Nは真北を、また表記のないものは、国上座標系に基づく座標北を示す。
6. 挿図・本文中の土色表記の基準は、『新版標準土色帖 1994年版』に基づく。
7. 各挿図に掲載した座標は、国土座標第VI系に基づく。なお、基準点測量については、震災後の改測データを採用して行っているため、座標値は震災以前と異なる場合がある。
8. 遺物実測図のなかで、番号の後ろに記号をつけることで遺物の種類を区別した。その記号の意味するところは以下の通りである。なお、土師器・須恵器には記号を付しておらず、須恵器は断面を黒塗りする事で区別している。
- (K) . . . 黒色土器、(G) . . . 瓦器、(J) . . . 磁器。
9. 各調査区の土地所有者、施工業者ならびに近隣住民の方々には、文化財保護に対して深いご理解とご協力をいただきました。併せてここに明記し、深謝いたします。

表 発掘調査一覧

遺跡名	(次数)	調　　査　地	調査面積 [m ²]	担当者	調査期間
曾根遺跡	第6次	曾根西町4丁目5 3丁目4	277	橋田正徳	1996年12月2日 ～1997年1月31日
穂積遺跡	第21次	服部南町3丁目40	51.25	清水 篤	1997年2月7日 ～3月28日
岡町南遺跡	第2次	岡町南 2丁目1-17	107.42	清家 章	1997年3月4日 ～3月24日

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 曾根遺跡第6次調査		
1. 調査の経緯	5
2. 調査地周辺の環境と既往の調査	6
3. 調査の概要	9
(1) 基本層序 (2) 検出した遺構と出土遺物		
4. まとめ	25
(1) 弥生時代後期から終末期の集落(2) 弥生時代後期初頭の堅穴住居		
(3) 平安時代前期の掘立柱建物		
第Ⅲ章 穂積遺跡第21次調査		
1. 調査の経緯	27
2. 調査の成果	27
(1) 基本層序 (2) 検出した遺構 (3) 出土遺物		
3. まとめ	34
第Ⅳ章 岡町南遺跡第2次調査		
1. 調査の経緯	35
2. 既往の調査	35
3. 調査成果	36
(1) 基本層序 (2) 検出した遺構と遺物		
4. まとめ	37

挿 図 目 次

第Ⅰ章 位置と環境

第1図 遺跡分布図 3	第2図 調査地点と周辺の地形 4
-----------	---------	----------------	---------

第Ⅱ章 曽根遺跡第6次調査の概要

第3図 調査範囲図 5	第17図 建物 出土遺物 16
第4図 調査地位置図 5	第18図 建物7 平面・断面図 17
第5図 曽根遺跡第3次調査 6	第19図 土坑1 平面・断面・ 土器出土状況図 18
第6図 調査区平面・断面図 7・8	第20図 土坑1 出土遺物 19
第7図 竪穴住居1 断面図 9	第21図 土坑2・3 断面図 19
第8図 竪穴住居1 平面図 10	第22図 土坑3 平面・土器出土状況図 20
第9図 周溝2 土器出土状況 11	第23図 土坑3 出土遺物 21
第10図 竪穴住居1 出土遺物 12	第24図 小型丸底壺出土状況 22
第11図 建物1 平面・断面図 13	第25図 布留式壺出土状況 22
第12図 建物2 平面・断面図 13	第26図 溝2 出土遺物 22
第13図 建物3 平面・断面図 14	第27図 溝4・5 出土遺物 23
第14図 建物4 平面・断面図 14	第28図 溝4・5 平面図 23
第15図 建物5 平面・断面図 15	第29図 溝4・5 土器出土状況・断面図	
第16図 建物6 平面・断面図 16	 24

第Ⅲ章 穂積遺跡第21次調査の概要

第30図 調査範囲図 27	第33図 出土遺物1 33
第31図 調査地位置図 27	第34図 出土遺物2 34
第32図 調査区平面・断面図 29・30		

第Ⅳ章 岡町南遺跡第2次調査の概要

第35図 調査範囲図 35	第38図 溝1 土師器出土状況 36
第36図 調査地点位置図 35	第39図 S P 1 断面 36
第37図 調査区平面・断面図 36	第40図 出土遺物 37

図版目次

図版 1 曾根遺跡第 6 次調査	(1) 調査区全景 (2) 溝 4 出土状況 (3) 溝 5 土器出土状況
図版 2 曾根遺跡第 6 次調査	(1) 穴穴住居 1 (2) 周溝 2 土器出土状況
図版 3 曾根遺跡第 6 次調査	(1) 建物 7 (2) 建物 7 柱穴 2
図版 4 曾根遺跡第 6 次調査	(1) 土坑 3 土器出土状況 (2) 土坑 3 断面
図版 5 曾根遺跡第 6 次調査 出土遺物	(1) 周溝 2 出土遺物
図版 6 曾根遺跡第 6 次調査 出土遺物	
図版 7 穂積遺跡第 21 次調査	(1) 調査区北半部遺構完掘状況 (2) 調査区南半部遺構完掘状況
図版 8 穂積遺跡第 21 次調査	(1) 調査区北壁(縁い堤東西)断面 (2) 調査区東壁(縁い堤南北)断面
図版 9 穂積遺跡第 21 次調査	(1) 土坑 1 土器出土状況(北側) (2) 土坑 1 土器出土状況(南側)
図版 10 穂積遺跡第 21 次調査	(1) 井戸 1 檜出状況 (2) 井戸 4 檜出状況
図版 11 穂積遺跡第 21 次調査 出土遺物	(1) 土坑 1 出土瓦器椀 (2) 土坑 1 出土瓦器椀
図版 12 穂積遺跡第 21 次調査 出土遺物	(1) 土坑 1 出土瓦器椀 (2) 土坑 1 出土瓦器椀
図版 13 穂積遺跡第 21 次調査 出土遺物	(1) 土坑 1 出土遺物
図版 14 穂積遺跡第 21 次調査 出土遺物	(1) 井戸 1・2 出土瓦器椀 (2) 井戸 1・4 出土遺物
図版 16 岡町南遺跡第 2 次調査	(1) 北区全景 (2) 南区全景

第Ⅰ章 位置と環境

地理的環境 豊中市は、大阪府北西部に位置し、西は猪名川を介して兵庫県に接している。旧国区分では摂津国豊島郡に属する。豊中市の地形は、北東部の千里丘陵部とそこから派生する中・低位段丘から構成される中部の通称豊中台地、さらにその西と南側に広がる猪名川などの冲積作用により形成された冲積平野とに分けることができる。今回調査を行った曾根遺跡・岡町南遺跡は中部の台地上に、穂積遺跡は豊中台地の南側に広がる冲積平野に位置している。

歴史的環境 豊中市には旧石器時代から人間が活動していたことが10点余りの出土した石器が示しているが、明確な遺構は検出されておらず、その詳細は明らかでない。縄文時代にはいると、豊中北部にある千里川の河岸段丘上に立地する内田遺跡・野畠遺跡・野畠春日町遺跡などで土塙墓などの遺構とともに後期から晩期の土器が出土し、北部の丘陵地帯が縄文人の活動範囲に入っていたことが理解される。さらに、南部の沖積地においても、明確な遺構の存在を欠くものの、服部遺跡・穂積遺跡・原田遺跡などから少量の土器が出土し、こうした低地においても縄文人が活動を行っていたことが伺われる。

弥生時代にはいると、集落の数が急速に増加する。前期では沖積低地にある勝部遺跡や小曾根遺跡などで集落が展開され始める。勝部・小曾根遺跡では中期に入っても引き続き集落が営まれる。これらの遺跡に加え、豊中中部の台地上にもあらたに集落が展開され始める。新免遺跡や螢池北遺跡である。さらに北部にある丘陵部の西端に位置する待兼山遺跡では、同時期の高地性集落が存在する可能性が示されている⁽¹⁾。

弥生時代後期にはいると、新免遺跡は一定の集落規模を維持するものの、小曾根遺跡の集落の動向は明らかでない。近年行われた19次調査では終末期に属する集落が、小曾根遺跡の北端で検出されているので、集落の場所が移動しているのかもしれない。これに関連するが、後期から終末期にかけて豊中では集落の数が増大し、これまで集落の存在が顕著でなかった穂積遺跡・服部遺跡・庄内遺跡などで集落が営まれるようになる。とくに、穂積遺跡・服部遺跡の集落規模は大きく、豊富な東西各地の撒入土器が指し示しているように、豊中台地下の東西交通路を媒介として集落が展開されたものと推定されている⁽²⁾。

しかし、こうした弥生時代後期～終末期の集落が連続して展開する古墳時代の集落は少ない。小曾根遺跡や利合西遺跡などはそうした少ない例に属する遺跡である。新免遺跡・本町遺跡などで大きな集落が古墳時代に営まれるが、これは中期から後期を中心とした時代であって、弥生時代から継続して集落が存在しているわけではなさそうである。古墳時代中期から千里丘陵の桜井谷窯跡群で営まれた須恵器生産を背景にして、熊野田遺跡・内田遺跡・柴原遺跡などとともに、新たに集落が形成あるいは再編されたものと理解される。

古墳は、北部の丘陵上に待兼山古墳と御神山古墳が築かれる。中部の豊中台地でも、大石塚古



1. 木庭様古墳群	11. 板井谷古墳群	21. 金寺山南寺	31. 同町南遺跡	41. 原田遺跡	51. 若竹町遺跡	61. 横横村圓塚
2. 野柳春日町六墳群	12. 安濃北遺跡	22. 新光宮山古墳群	32. 桜塚古墳群	42. 豊根古道跡	52. 石蓮寺庵寺	62. 小曾根道跡
3. 藤畠遺跡	13. 弓池東遺跡	23. 今山寺谷探照廻石	33. 下原窪群	43. 佐根東遺跡	53. 寺内遺跡	63. 齐藤昔代今坂元遺跡
4. 葛原春日可遺跡	14. 貝浦西遺跡	24. 本町遺跡	34. 荒井寺遺跡	44. 原田中町遺跡	54. 利倉北遺跡	64. 之条遺跡
5. 少瀬遺跡	15. 豊池遺跡	25. 新光遺跡	35. 鹿塚古墳	45. 原田元町遺跡	55. 利倉遺跡	65. 上津島川東遺跡
6. 寺北山古墳	16. 西田零草原遺跡	26. 笠塚遺跡	36. 雄物松古墳	46. 墓輪塚跡	56. 利介南遺跡	66. 上津島南遺跡
7. 侍業山遺跡	17. 岩刀根山遺跡	27. 上ノ山遺跡	37. 原田西遺跡	47. 久島北遺跡	57. 利倉西遺跡	67. 上津島南北遺跡
8. 内田遺跡	18. 仰御山古墳	28. 走井遺跡	38. 豊根遺跡	48. 佐根南遺跡	58. 畦堂の前遺跡	68. 猪俣ポンゾ遺跡
9. 板井谷石器載石地	19. 上野遺跡	29. 同町北遺跡	39. 那部東遺跡	49. 城山遺跡	59. 那部西遺跡	69. 田山遺跡
10. 熊野遺跡	20. 鮎野田遺跡	30. 同町遺跡	40. 原田城跡	50. 重井遺跡	60. 稲穂遺跡	70. 山内遺跡
						71. 岸江遺跡

第1図 遺跡分布図

墳を端緒として桜塚古墳群が形成され始める。前2者に継続する古墳は今のところ見つかっていないのに対して、桜塚古墳群は中期になんでも古墳築造は継続され、豊中だけでなく猪名川左岸を代表する古墳群となる。その数はかつて40基以上はあったとされるが、現在は5基を残すのみである。隆盛を誇った桜塚古墳群も、後期に入ると築造を停止する。その一方で、箕面川水系の東岸（池田市）では、中期には見られなかった大形の古墳が築造されるようになる。その代表的なものとして、全長約60mの池田二子山古墳と直径45mの円墳・鉢塚古墳がある。千里川流域では4つの後期古墳群が新たに形成される。まず、新免遺跡の集落の南側に、全長25mの帆立貝式古墳を代表とする比較的規模の大きな墳丘を有する新免古墳群がある。この古墳群は後期前半に築造を停止してしまうが、それに継続するかのように、新免宮山古墳群がその少し北側に、また、桜井谷窓跡群内に太鼓塚古墳群と春日町古墳群が形成される。これらの古墳群で営まれた古墳の数は少なく、猪名川右岸とは対照的である。群集墳が発達しないことも豊中の古墳時代の特徴の一つである。新免宮山・太鼓塚古墳群のいずれからも陶棺が出土しており、桜井谷窓跡群と関係が伺われる。その桜井谷窓跡群は古墳時代中期中葉から操業を開始し、古墳時代後期の最盛期をへて奈良時代まで窓が作られ続ける。現在は数基しか遺存していないが、かつては50基以上は存在したと伝えられる。

古代に入り、古墳築造が行われなくなると、代わって寺院が建築され始める。豊中では現在の豊中駅の東側に金寺廃寺があったとされ、塔の礎石や瓦が現在に伝わっている。また、この寺院と関係すると推測される大形掘立柱建物が本町遺跡において検出されている。また、螢池北遺跡（宮の前遺跡）でも、大形建物が存在している。この地は、山陽道と能勢街道が交わる交通の要所であり、これら建物群は一般的な集落ではなく、律令期の役所である可能性が指摘されている。また、曾根遺跡でも官衙あるいは豪族の居館と考えられる大形建物群が検出されている。

古代末から中世にはいると、沖積平野にある小曾根遺跡・鳥田遺跡・穂積遺跡でまとまった集落が展開され始める。ただ、その調査はいまだ断片的であり、これら中世村落の詳しい内容は、これから調査に負うところが大きい。

また、小曾根遺跡や穂積遺跡は、摂家の荘園とされる範囲内にある。後に春日大社に寄進され、春日社から今西氏が代官として派遣され、屋敷を構えるようになる。今西氏は荘園解体後も代官から代官とその性格を変えながらも存続しつづける。

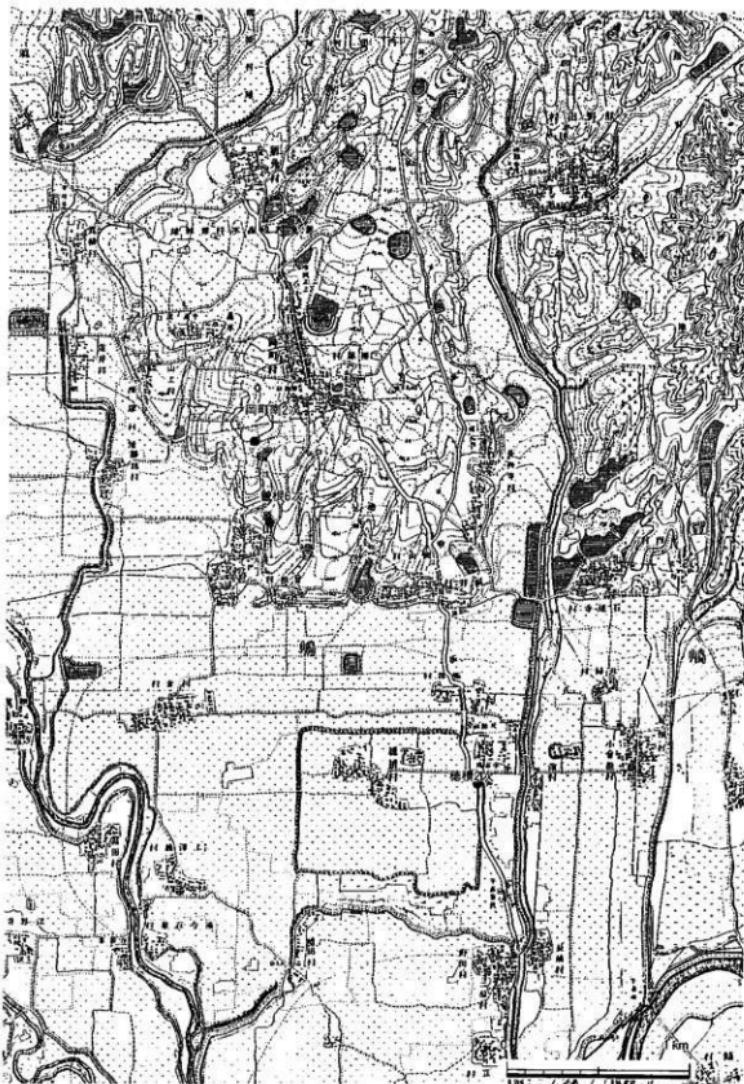
注)

(1) 大阪大学待兼山遺跡発掘調査団編 1984 『待兼山遺跡』。

福永伸哉編 1988 『待兼山遺跡Ⅱ』 大阪大学埋蔵文化財調査委員会。

(2) 服部聰志 1995 大阪府豊中市における弥生時代後～後末期の集落と墓地

—服部遺跡の調査から—『みずほ』第17号。

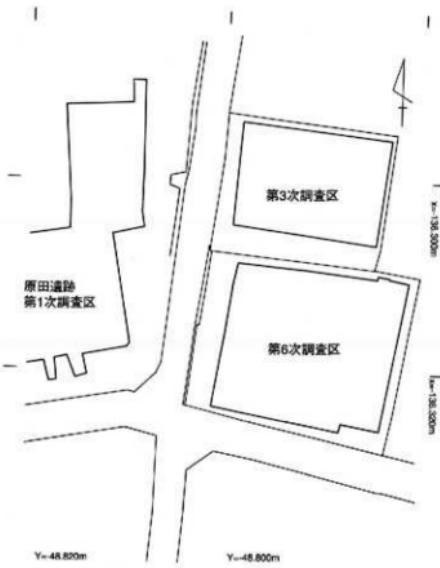


第2図 調査地点と周辺地形

第Ⅱ章 曾根遺跡第6次調査

1. 調査の経緯

調査地は、曾根西町3・4丁目に所在し、曾根遺跡第3次調査区、および原田遺跡第1次調査区に近接する。これらの調査では、多数の遺構が検出されており、当該地にも遺構が広がることが予想された。よって、平成8年11月13日に提出された埋蔵文化財発掘の届出にもとづく協議の結果、基礎工事により遺構が損壊をうける277m²を対象に、平成8年12月2日から翌年1月31日の期間で発掘調査を行うこととなった。なお、建物は個人住宅部分と共同住宅部分にわかれため、双方の占有面積に応じた費用按分を行い、個人住宅部分を国庫負担とした。



第3図 調査範囲図 (1:500)



第4図 調査地位置図 (1:5000)

2. 調査地周辺の環境と既往の調査

曾根遺跡は、通称豊中台地南西端から派生する舌状丘陵上に立地する。丘陵の裾野に広がる低段位丘との高低差は約5mであり、南西に広がる平野を見渡せる位置にある。また、近世には桜塚街道などの旧道がはりり、猪名川東岸の平野部と豊中台地をつなぐ交通上の中途点としても注意される環境にある。なお、丘陵の裾野には古墳時代頃の集落遺跡である原田遺跡が立地する。

曾根遺跡は、1930年代頃の住宅建築工事で弥生時代後期の包含層や古墳時代の住居が発見されその存在が知られるようになった。その後、1986年にはじめて本格的な調査が行われて、今回で6次となる。

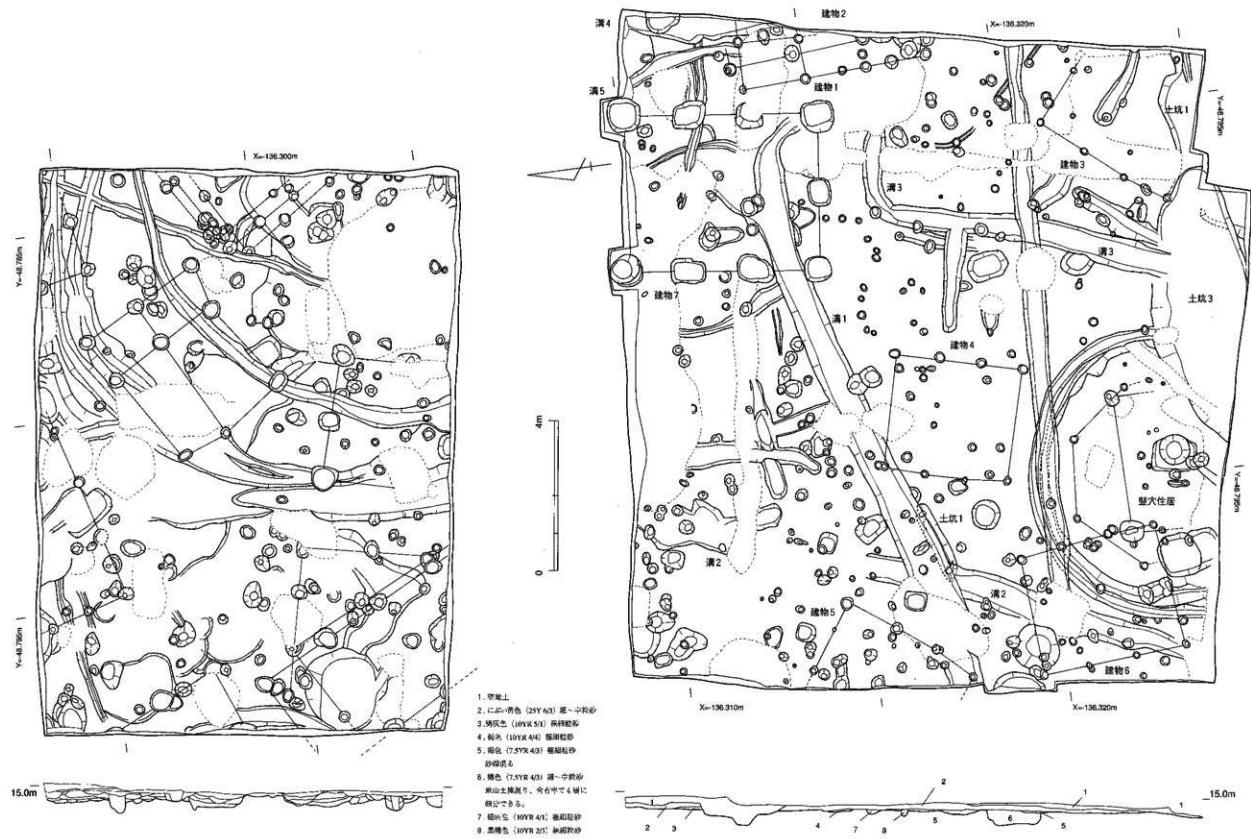
丘陵中央から突端部にかけて行われた第1次調査では、弥生時代中期末から後期にかけての土坑や竪穴住居とともに奈良～平安時代の官衙関連施設もしくは領主居館に推定される大型建物群が検出された。続く第2次調査では、丘陵東側斜面において弥生時代後期から古墳時代前期、および古墳時代後期、鎌倉時代前期の遺構を確認し、遺跡が丘陵斜面に広がること、また中世にいたる複合遺跡となることが明らかになった。さらに第3、4次調査および同丘陵から西方へ派生する（仮称）第2丘陵で行われた原田遺跡第1次調査では、夥しい数の柱穴、土坑、溝などを検出した。特に当該調査区の北側に隣接する第3次調査では弥生時代後期前後の掘立柱建物4棟以上、奈良時代後期の掘立柱建物5棟をはじめとする弥生時代後期から奈良時代の遺構を検出し、丘陵中央部から北西部の一帯に弥生時代後期から終末期にかけて密集度の高い集落が展開すること、また奈良時代の集落が丘陵の広い範囲に点在することが明らかにされた。さらに、第5次調査では第1次調査の大型建物群と関連する建物や、これに付属する井戸などが検出され、その結果建物群が奈良時代後期頃と平安時代前期の2時期に大別され、第Ⅱ期には略東西を基準軸とする逆L字またはコの字形の平面配置をとる規格性の高い建物群が成立することが判明した。また、当該調査では平安時代後期の木棺墓なども検出していることから、丘陵が大型建物群の廃絶後も引き続き開発の対象範囲であった可能性も考えられる。

以上、過去5次の調査において、曾根遺跡が多彩な内容を有する遺跡であることが判明したが、

各時期の様相については今なお不明な部分が多い。強いて、遺跡としての特徴をみると、絶好の地理的条件にありながら、舌状丘陵という限られた空間に制約されたためか、各時期の集落には拠点性が見られないにもかかわらず、官衙もしくは領主居館とすべき建物群や中世城郭である原田城が営まれるなど、同じ豊中台地北西に位置する新免遺跡、本町遺跡などではみられない特異性が挙げられよう。



第5図 曽根遺跡第3次調査



第6図 調査区平面・断面図 (1:100)

3. 調査の概要

(1) 基本層序

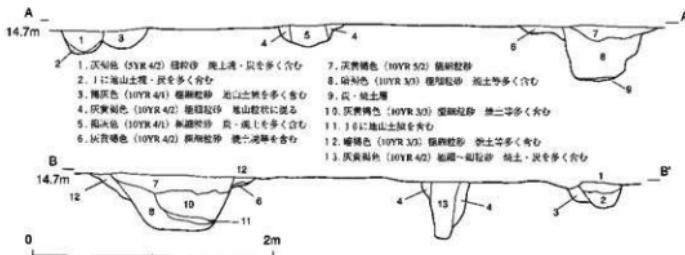
当該調査区周辺は、「野口家文書」の各絵図から、近世には島として開発されていたことが知られており、宅地となるのは戦前頃からである。調査区では、宅地化に伴う整地層を表土に、以下に述べた黄色等を呈する中世の耕作土、明褐色粘質土（地山）を確認したが、第3次調査区で確認された遺物包含層は認められなかった。また、調査区の現地表は標高14.8~9mをはかり、第3次調査区から引き続き、南へ緩やかに傾斜する。この傾斜に伴い地山の削平が著しくなる傾向が認められるものの、その上面には中世もしくは近世の耕作土が残存していることから、この時期の耕地化に伴う開発が地表面を削平する規模であったことが想定できる。なお、当該調査区における遺構は、一部を除いて地山となる明褐色粘質土層の上面から検出した。

(2) 検出した遺構と出土遺物

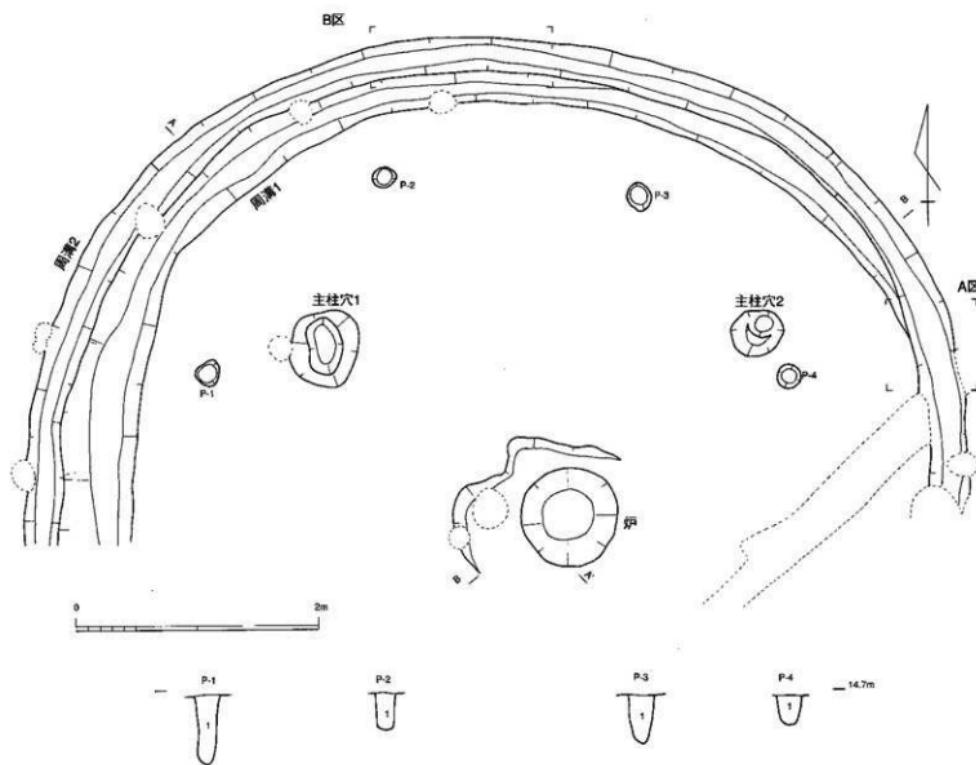
当調査区では、ピット約320基、土坑14基、溝15条、カマド1基を検出した。これらのピットから竪穴住居1棟、掘立柱建物7棟以上を復元した。これらの遺構は、ほぼ弥生時代後期初頭から古墳時代前期、平安時代前期、中世以降の3時期に大別できる。

竪穴住居 1 調査区南部で住居のはば北半分を検出した。外周を巡る周溝1・2から平面円形の住居と考えられる。後世の削平により床面などは残存していなかったが、周溝、主柱穴、炉などを検出した。

周溝1・2は平面円形を呈する溝で、検出面での直径（内法）は周溝1で7.5m、周溝2で7.8mをはかり、ほぼ同位置において検出された。周溝は共に幅40cm、深さ20cm前後をはかり、逆台形状の断面を呈する。周溝1・2の埋土は機能停止後に埋め戻されており、壁溝とは考えにくいことから、住居の周囲を巡る周溝と考えた。断面観察から周溝1を埋め戻した後に周溝2が掘削されると共に、周溝の直径が拡大することから住居の拡張が想定できる。周溝2の埋土には多量の焼土塊が含まれており、住居廃絶時に上屋を燃やした可能性がある。なお、周溝2からは、第10回図1~6の土器が出土した。



第7図 竪穴住居1断面図 (1: 40)



1.灰黄褐色 (10YR 4/2) 极細粒砂 地山粒状で混る

第8図 竪穴住居1平面図 (1: 40)

炉は、住居のはば中央において検出した。直径 80 cm、深さ 50 cm をかり、平面は円形を呈する。その周囲の地山は被熱したためか変色している。埋土は炭、焼土を多量に含む墨褐色細粒砂からなるが、その堆積状況から掘り返した可能性が考えられる。なお、炉内からは若干の土

器片が出土したが、図化できるものはなかった。

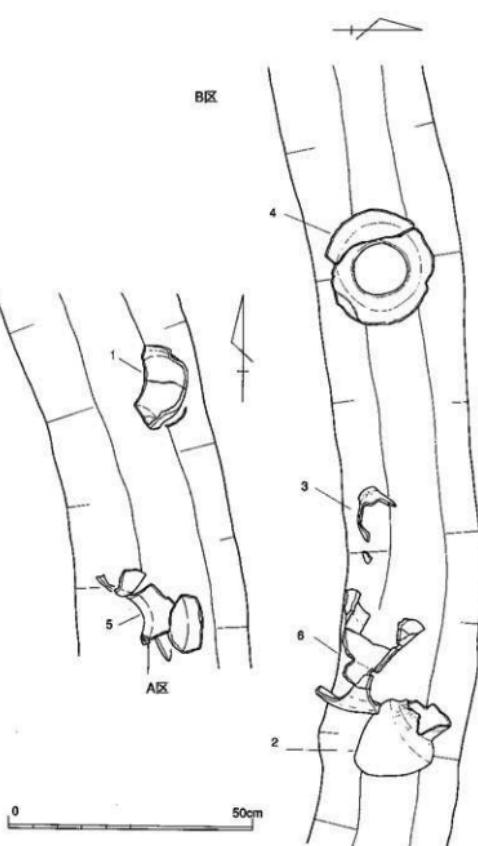
主柱穴は周溝1と炉の中間よりやや周溝寄りの位置で検出した。主柱穴間の間隔は3.6mで、周溝1の直径の1/2にあたる。ピットは直径40cm、深さ50cm程度をはかる。なお、主柱穴2の柱痕部分に相当する埋土から第10図7の甌底部が出土している。

また、周溝2の内側にそつて直径17cm前後の小ピット4基を検出した。ピットは溝2からほぼ90cm前後内側に沿ってほぼ2m間隔で並ぶ。その配置に規則性があることから、住居に伴う可能性がある。

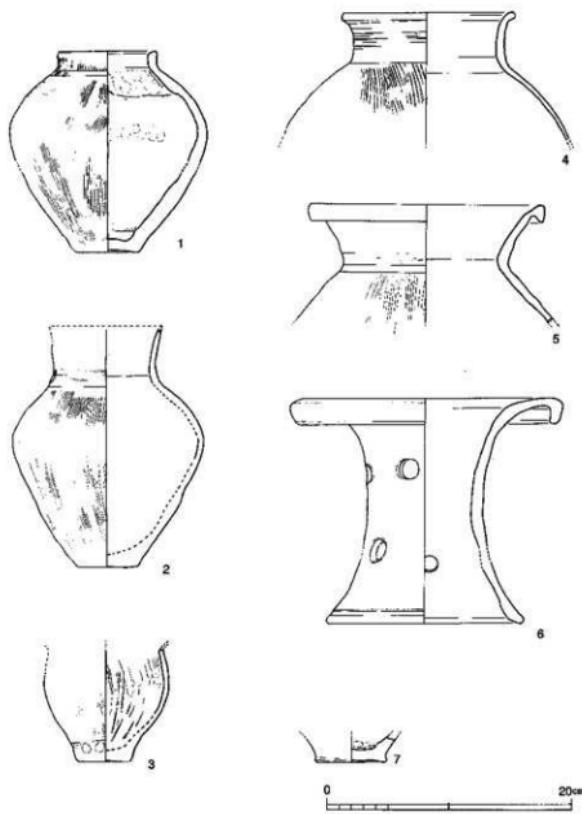
なお、周溝1・2の重複関係から住居が西側へ拡張された可能性を想定したが、これにともなう主柱穴の移動は認められないことや、主柱穴が周溝1、小ピットが周溝2に対応する位置にあることから、拡張に伴い住居構造に変更があった可能性を考えられる。

出土遺物 周溝2（第10図1～6）および主柱穴2（第10図7）から遺物が出土している。主要な遺物は周溝2から出土しており、住居の廃絶時期を示すものと考えられる。

1は、中型の無頸甌である。復元した口径約8cm、器高16.6cmをはかる。肩にやや張りがある体部からわずかに直上へ伸びる口縁がつく。口縁から体部上半は縱方向のハケを、体部下半には板ナデを施す。内面の調整は、器壁の風化が著しく明確ではない。2は、中型の直口甌である。口径は約9cm、器高約20cm、底部径5.6cmをはかる。肩にやや張りのある体部から、直



第9図 周溝2土器出土状況（1：10）

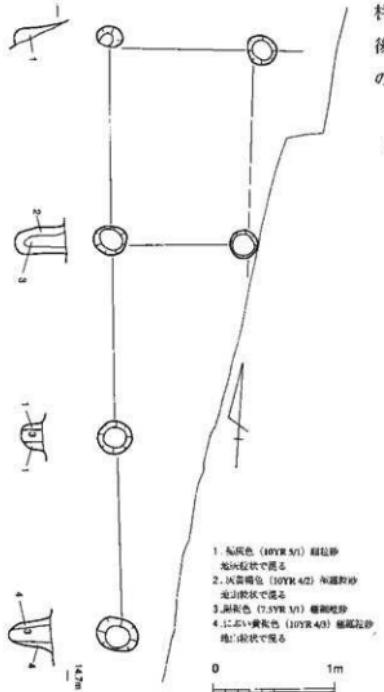


第10図 穂穴住居1出土遺物 (1:4) ※1~6は周溝出土、7は主柱穴2出土
 線的な口頭部がやや外寄りに開く。口頭部は横方向のナデを、体部外面には縦方向のハケを施す。
 内面の調整は、風化等により明確ではない。3は、小型の甕である。体部高9.2cm、体部最大
 径約10cmをはかる。体部上半に張りがある器形である。口縁部は欠損しており、形状は明確で
 はない。体部外面下半は縦方向のハケを、内面にはヘラケズリを施す。4は、やや大型の短頸甕
 で、口径14cmをはかる。肩に張りのある体部から直立した頭部がつき、外反気味に屈曲した口
 縁が伸びる。頭部には、幅7~8mmの粗雑な凹線が5条程度施される。体部外面には斜め方向の
 ハケが施される。内面の調整は、器壁の風化が著しく明確ではない。胎土は褐色を帯び、混和材
 となる細粒砂の母材も他の土器と異なることから、撒入品となる可能性も考えられる。5は、や

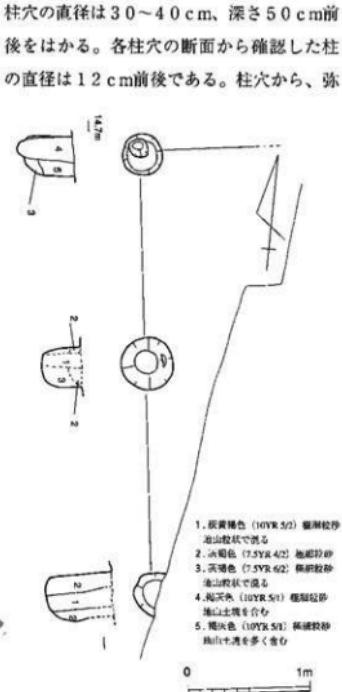
や大型の広口壺である。口径 14.5 cm、頭部長 5 cm をはかる。頭部はやや外反味に立上がり、口縁端部は粘土帶で拡張されるが、明確な施文は認められなかった。6 は、中型の器台で、復元した口径は約 19.4 cm、器高は約 23 cm をはかる。受部、胸部、裾部の区分が明瞭に認められる。胸部上段には 4 方向、下段には 6 方向の穿孔を施す。また、裾部端に 1 条の凹線が施される。なお、器壁内外面ともに風化が著しく、調整は不明である。7 は、壺底部で、底部径 6 cm をはかる。内底面には成形時の押圧痕が明瞭に残る。外面の調整は、器壁の風化が著しく明確ではない。

以上、溝 2 の遺物は新免遺跡第 22 次調査 SH-10 出上遺物よりわずかに新しい傾向がみられることから、第 V 様式前半（森田編年 V-2 様式）の所産と考えられ、住居の廃絶がこの時期にあったことをしめす。よって、住居の時期は後期初頭頃となる。

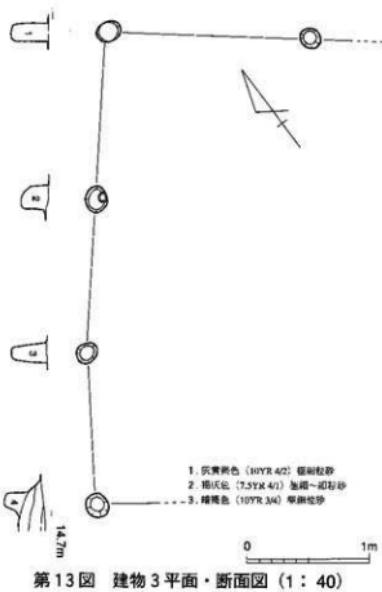
建物 1 調査区東部で建物のおよそ 3 分の 1 程度を検出した。建物は調査区外に広がるため、全容は明確にできないが、桁行 3 間（5.9 m）、梁間 2 間以上の総柱建物となる。建物の主軸方向は座標北に対して N-3°-W で、やや西に傾く。柱の間隔は、桁行で 1.6 m 前後をはかる。各々の



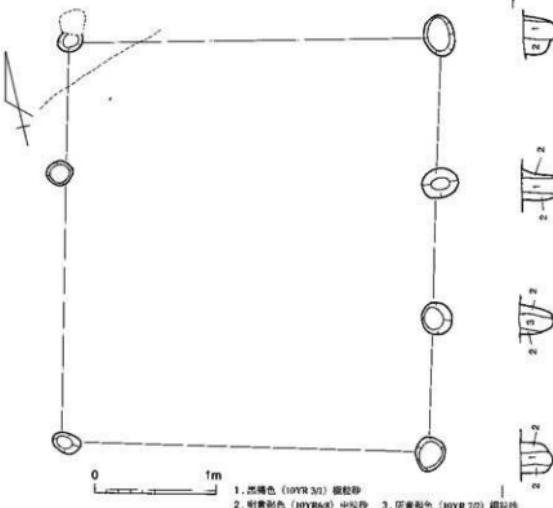
第11図 建物1平面・断面図 (1:40)



第12図 建物2平面・断面図 (1:40)



第13図 建物3平面・断面図 (1:40)



第14図 建物4平面・断面図 (1:40)

生時代後期の土器細片が出土している。

建物2（柱穴列） 調査区東部で検出した柱穴列である。桁行を確認していないため、建物と確定するには問題を残すが、直径30cm、深さ30cm前後の掘方に明確な柱痕を有する柱穴が列をなすことから、建物の一部になるものとして扱った。この場合、梁間2間以上、主軸方向は座標北に対してN-87°-Eでほぼ東に向く建物となる可能性が予想される。柱穴から、弥生時代後期の土器細片が出土している。

建物3 調査区南東付近で検出した桁行3間(3.9m)、梁間2間の建物となる可能性が考えられる。建物の面積は明確にできないが、1.0m前後の小型の建物になる可能性がある。建物の主軸方向は、座標北に対してN-38°-Eで北東に傾く。桁行の柱

の間隔は1.3m前後で、それぞれの柱穴の直径は15~30cm、深さ30cm前後をはかる。建物は南西端の柱穴が土坑2に削平されていることから、弥生時代後期が時期の下限といえる。

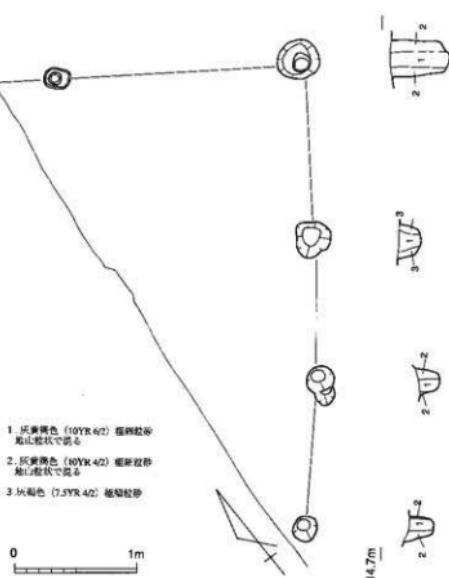
建物4 調査区中央付近で検出した桁行3間(3.5m)、梁間1間(3m)の建物である。建物の面積は、10.5m²で小形である。建物

の主軸方向は、座標北に対して N-14°-E でやや東に傾く。桁行の柱の間隔は 1.35m 前後で、それぞれの柱穴の直径は 25cm、深さ 30cm 前後をはかる。各柱穴の断面から確認した柱の直径は 10cm 前後である。柱穴から第 17 図 1 の弥生時代後期の甕底部が出土していることから、この時期の所産となる可能性が考えられる。

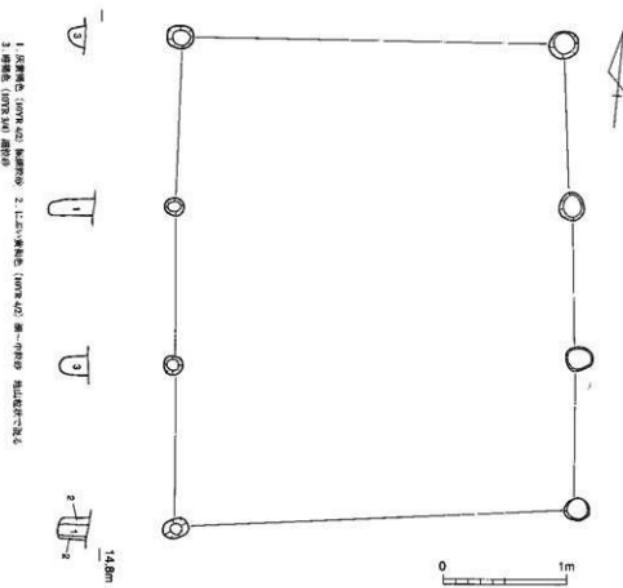
建物 5 調査区西部で建物の半分程度を検出した。建物は調査区外へ広がるため全容は明確ではないが、柱穴の規模からみて建物 2・3 と同様の規模・構造を想定したい。検出部分における建物の規模は、桁行 3 間（3.8m）以上となる。建物の主軸方向は、座標北に対して N-37°-E で東に傾く。桁行の柱の間隔は 1.2m 前後で、それぞれの柱穴の直径は 25cm 前後、深さ 30~40cm 程度をはかる。各柱穴の断面から確認した柱の直径は 10~15cm である。柱穴から遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、建物 3~6 と同様の特徴を有することから、これらと前後する時期の所産と考えられる。

建物 6 調査区西部で検出した桁行 3 間（3.1m）、梁間 1 間（4.0m）の建物である。建物の面積は、12.4m² と小型である。建物の主軸方向は、座標北に対して N-5°-W でやや西に傾く。桁行の柱の間隔は 1.35m 前後で、それぞれの柱穴の直径は 15~20cm、深さ 25cm 程度をはかる。各柱穴の断面から確認した柱の直径は 10cm 前後である。北東コーナーにあたる柱穴から弥生時代後期頃と考えられる甕の底部（第 17 図 2）が出土し、また柱穴の一部が竪穴住居 1 の周溝上面から掘り込まれていることから、弥生時代後期前半以降の所産となる。

建物 7 調査区北東部で検出した桁行 3 間（5.1m）、梁間 2 間（4.2m）の側柱建物である。建物の規模は 21m² で同時期の建物としては普通である。しかし、建物南辺の柱穴列を除く、すべての柱穴が同規模の柱穴と重複して検出されていることから、規模や位置を殆ど変えずに建て替えを行った可能性が考えられる。このような現象は通常の建物には見られず、建物 7 の性格には特異性が認められる。建て替え後の柱の間隔は、桁行で 1.6m~1.8m、梁間で 2.0m~2.2m をはか



第 15 図 建物 5 平面・断面図 (1: 40)

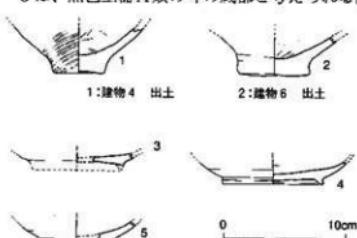


第16図 建物6平面・断面図(1:40)

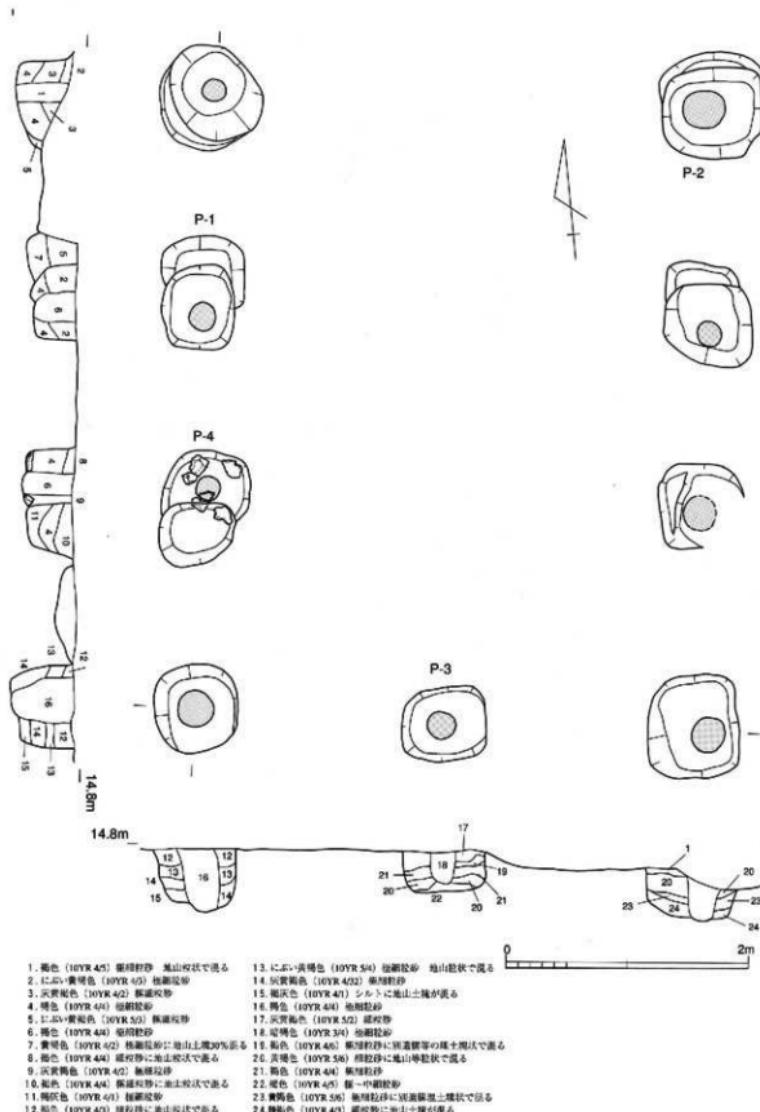
る。検出した柱穴は隅丸方形の平面形を呈し、コーナー部にあたる柱穴の直径は0.9m、深さ0.5mとやや大きく、それ以外の柱穴は直徑0.5m、深さ0.5mをはかる。主軸方向は、座標北に対してN-6°-Eでやや東に傾き、第1・5次調査で検出した大型建物の主軸方向と近似する。なお、建物西辺のSP-4の基底部から、柱の根固めに伴う配石が認められた。

出土遺物 3はSP-1の掘削埋土、4はSP-2の掘削埋土、5はSP-3の柱痕埋土から出土した。

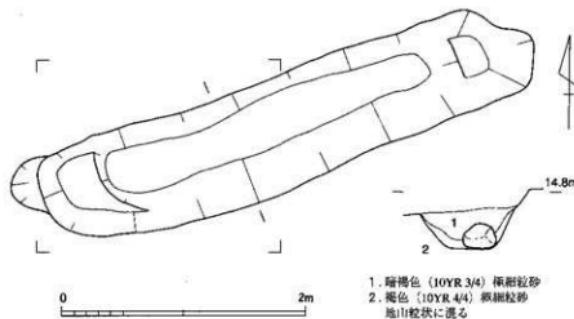
3は、黒色土器A類の壺の底部と考えられる。風化が著しく、調整、高台の有無は明確ではないが、胎土には良質の粘土を用いている。4は、灰釉陶器壺の底部である。平坦な底部にやや外向に向く高台につく。復元した高台径は約8cmである。底部外面から体部にかけて精緻な回転ヘラケズリを施す。見込み全面に施釉されるが、ハケの痕跡は認められない。黒笠14号窯段階のものと考えられる。5は綠釉陶器の底部である。残存部分が少なく、器種は明確にできない。軟質



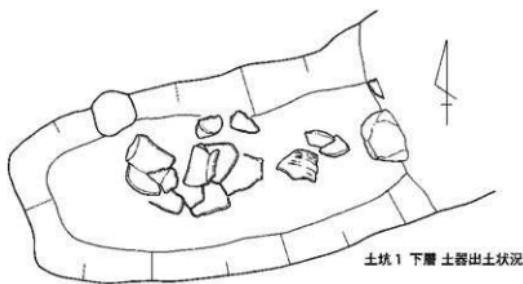
第17図 建物出土遺物(1:4)



第18図 建物7平面・断面図 (1: 40)



土坑1 上層 土器出土状況



土坑1 下層 土器出土状況

0 1m

第19図 土坑1平面・断面・土器出土状況図 (1:40・1:20)

の胎土に黄緑色の施釉が施され、洛西産の特徴を有する。底部外面は糸切りとなる可能性を考えられるが、風化が著しく明瞭ではない。これらの遺物のうち、4の灰釉陶器から建物の時期は9

世紀前半から中頃と考えられ、ほぼ大型建物群が成立する時期と前後する。

土坑1 調査区西部で検出した。土坑は古代の溝1によつて削平されていたため、正確な規模は明確ではないが、検出面における土坑の長さは4.2m、幅0.9m、深さ0.25mをはかる。土坑の長軸は座標北に対してN-65°-Eで、北東に傾く。土坑南側の土層1上面及び土層1・2の層境の2か所から、弥生時代後期の土器がまとめて出土した。

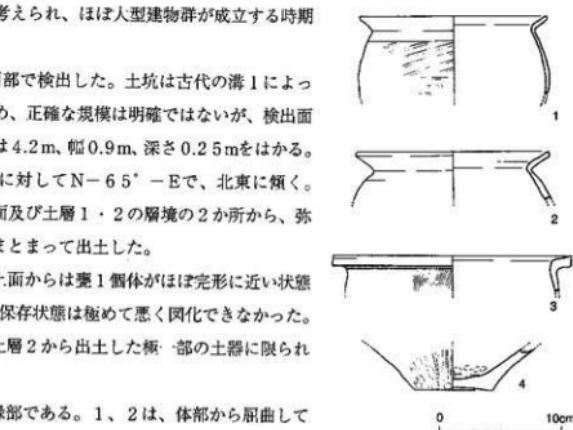
出土遺物 土層1上面からは壺1個体がほぼ完形に近い状態で出土したが、土器の保存状態は極めて悪く固化できなかった。固化できた遺物は、土層2から出土した柄・部の土器に限られた。

1~3は、壺の口縁部である。1、2は、体部から屈曲して外反気味に開く口縁をもち、口縁内外面に横方向のナデを施す。復元した1の口径は約17.2cm、2は16cmをはかる。3は、体部からほぼ直角に屈曲する肥厚した口縁を有する。復元した口径は約19.4cm

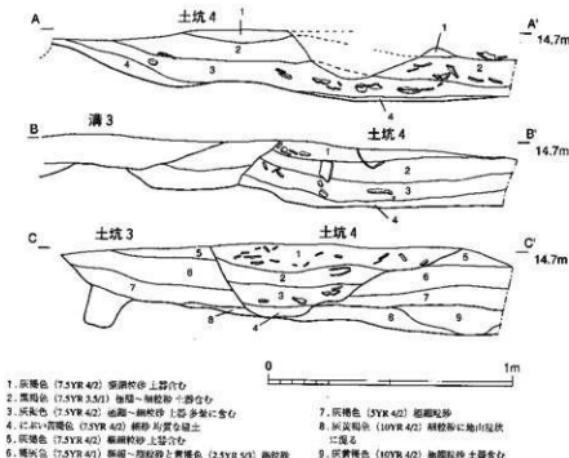
をはかる。口縁部内外面にナデを、体部外面に縦方向のハケを施す。4は、壺底部で、底部径6cmをはかる。

体部外面は縦方向のヘラミガキを施し、内面には押圧痕を残す。これらの遺物は、3を除いて弥生時代後期の所産と考えられる。

土坑2 調査区東南隅で検出した大型

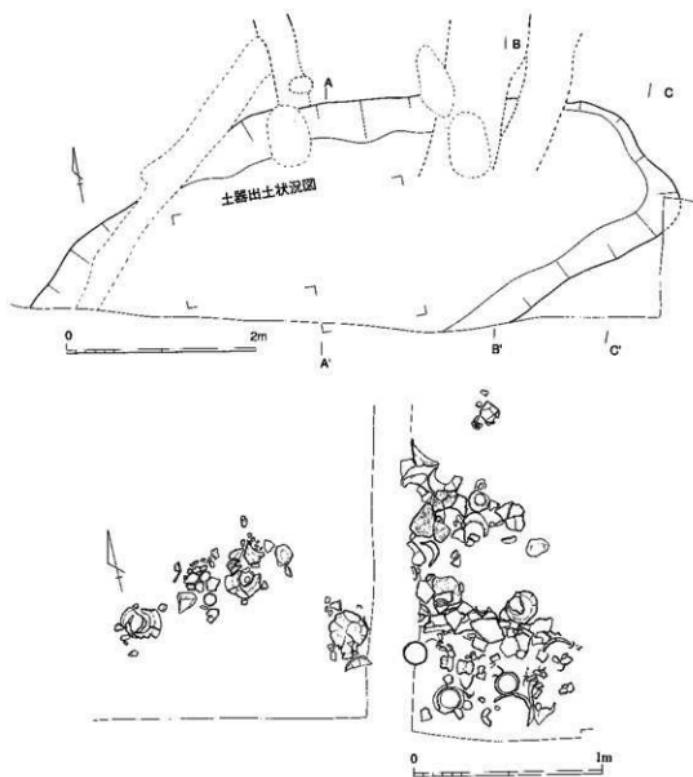


第20図 土坑1 出土遺物
(1:4)



第21図 土坑2・3断面図 (1:20)

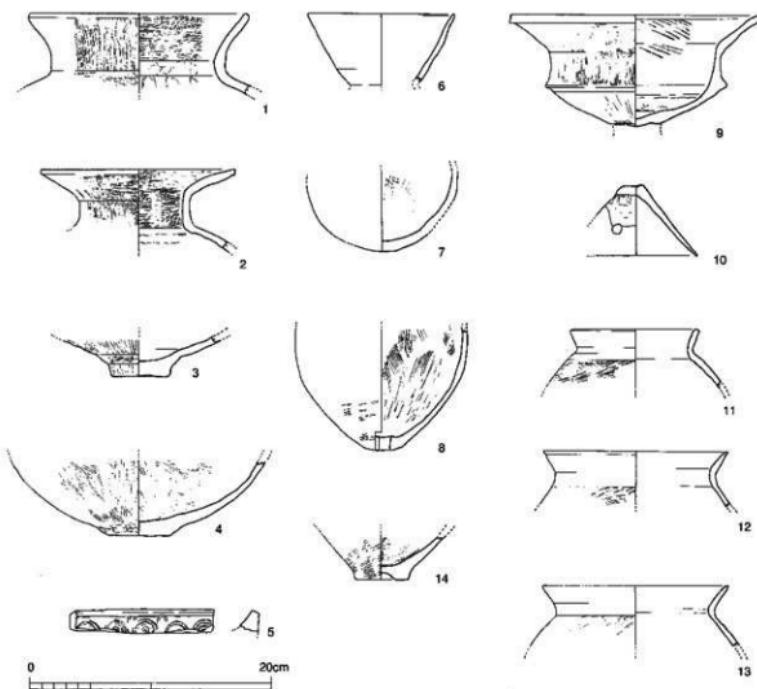
の土坑である。土坑の南側は調査区外に広がり、西側は土坑5の掘削により削平されていることから、正確な規模、形状は明確ではないが、少なくとも直径3m以上の大規模な土坑となる。褐灰



第22図 土坑3平面・土器出土状況図(1:50・1:25)

色細粒砂等からなる均質な埋土は大まか4層前後に区分できるが、堆積に方向性は認められないことから開口後の土砂の流入によって埋没したものと考えられる。埋土からは弥生時代後期の土器片が出土したが、出土状況にまとまりはなく、土砂流入時に混入したものと考えられる。

土坑3 調査区南部で検出した大型の土坑である。土坑の南側は調査区外に広がるため、正確な規模・形状は明確ではないが、検出面における状況から長さ6m以上、幅2.5m以上、深さ0.25m前後の土坑となる。土坑は、肩口から緩やかに傾斜して平坦な基底部にいたる。一見して落ち込みともみられるが、一部で南側の掘形を検出していることから、土坑とした。灰褐色細粒砂からなる土坑の埋土は、ほぼ4層に大別できる。なお、いずれの層にも多量の土器片が含まれるが、特に土層2・3からは遺物がまとまって出土した。これら出土した遺物の殆どは保存状態

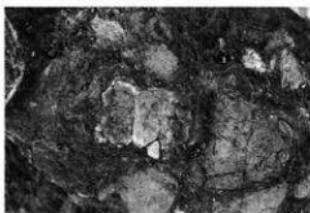


第23図 土坑3出土遺物(1:4)

が極めて悪く、図化できた遺物はその一部に限られる。

出土遺物 図化できた遺物はすべて土層2・3から出土したものである。

1は、直口壺の頸部である。口径は復元値で約18cmをはかる。頸部は体部からやや外反気味に立ち上がるが、口縁部は内半気味に緩やかに屈曲する。頸部外面には横方向のナデを施したあとに縦方向の粗いミガキを施す。内面には横方向のハケを施したのち、同じく横方向のミガキを施す。2は広口壺の口頸部で、口径14.5cmをはかる。直立する頸部から大きく外反する口縁部を有する。口縁外面には横方向のミガキを、頸部外面には縦方向のミガキ、内面には横方向のハケを施す。3・4は壺の底部である。3は球胴化した体部から突出した円盤状の底部が作られている。4は球胴化した体部底面に粘土帯を付加して底部を作るが、その区分は明確ではなく退行している。5は、広口壺の口縁端部である。端部は拡張され、側面に竹管文と満巻き文の施文がある。6は、やや小型の直口壺の口頸部である。口径12cmをはかる。体部から屈曲し、やや外方へ開く直線的な形状である。器壁の風化が著しく、内外面の調整は不明である。7は、中型の



第24図 小型丸底壺出土状況



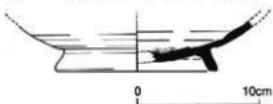
第25図 布留式壺出土状況

丸底壺の底部である。体部最大径は約13cmをはかる。内面はハケを施すが、外面の調整は不明である。8は、やや小型の鉢である。口縁部は欠損しており、器高は不明である。体部最大径は14cm、体部高10cmをはかる。底部には直径1.2cmの穿孔を有する。体部外面下半の一部にタタキの痕跡を認めるが、外面全体の調整は不明である。内面上半はハケを、下半はヘラケヅリを施す。9は、高環部である。口径21.8cm、器高9.2cmをはかる。上縁部は大きく外反するものの、段は形成しない。口縁端部は、ナデによりわずかに拡張されている。上縁部外面は縦方向のハケを、内面には斜め方向の粗いハケを施す。脚部との接合には、充填法が用いられている。10は、小型の器台脚部である。中段に3方向の穿孔を施す。内外面の調整は明確ではない。受部との接合には挿入付加法が用いられている。11~13は、壺の口縁部である。屈曲して外方へ短く開く口縁を有する。体部外面にはタタキを、口縁部にはナデを施す。14は、壺底部である。やや球胴に近い体部とは明確に区分された底部を有する。体部外面にはタタキを、内面にはハケを施す。

以上、土坑5から出土した遺物には時期幅があるものの、このほかにも、小型丸底壺や布留式古相の壺などが出土していることから、土坑5の時期は布留式古相前後と考えたい。

溝1 調査区中央付近を、北東→南西方向に横断する溝である。幅1m前後、深さ0.1m程度の浅い溝である。溝内の埋土は2層程度に区分できるが、いずれも円礫を含む褐色細粒砂からなる。これらの埋土の特徴を見る限り、溝内に流水を想定しにくい。また、溝の高低差についても、東端と西端の差はわずかに3cmであり、周囲の地形から南西方向への流水が推定できるだけにとどまる。よって、溝が用水路として恒常的な水利目的のために機能したものとは考えにくいが、当調査区の周辺は近世段階で畠作中心の土地利用をおこなっていることから、畠作に関連する機能を想定したい。なお、溝から出土した遺物は、弥生土器と須恵器が中心となるが、8世紀後半以降の溝2や、掘立柱建物7の柱穴を削平していることから、平安時代以後の所産と考えられる。

溝2 調査区西部を南北に縦断する溝である。幅1m前後、深さ0.1m前後の浅い溝で、調査



第26図 溝2出土遺物(1:4)

区中部付近で途切れる。南側にむけて緩やかに傾斜するが、埋土に流水に伴う明確な堆積は認められなかった。遺物に8世紀後半と考えられる須恵器の壺底部を含むが、黒色土器となる可能性も考えられる土器細片を採取

していることから9世紀以降の所産となる可能性も残っている。

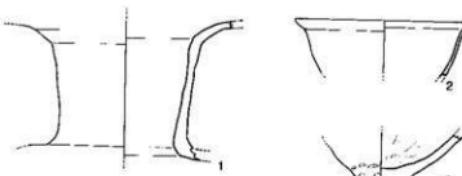
出土遺物としては、先に述べた第26図の須恵器壺底部がある。復元した高台径は13.4cmをはかる。球胴形の体部に、外方へ開く直線的な高台がつく。体部外面は回転ヘラケズリを、内面には回転ナデを施すが、底面は未調整で押圧痕を残す。

溝3 調査区東部で検出した東西方向から南にはば直角に屈曲する溝である。溝の北半分は剖平をうけ、正確な規模は不明であるが南側では幅4.5~5.5cm、深さ1.5cmをはかる。溝は、屈曲することから区画溝となる可能性が考えられるが、溝の内側から溝の方向と共通する建物などは確認されなかった。出土した遺物は、土坑5からの混入したものが多く、時期を明確にはできないが、溝2と併行する関係からみて平安時代の所産と考えられる。

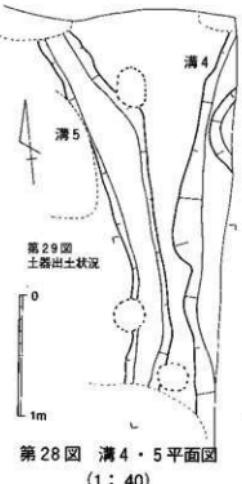
溝4 調査区北東部で溝の西側の一部を検出した。溝5同様に略南北方向に伸びるが、西向きに緩やかな弧を描く平面形を呈する。溝の東側が調査区外にあるため、その規模は明確ではないが、検出部分の断面形状から幅6.0cm前後、深さ1.0cm前後の溝になるものと考えられる。褐色細粒砂からなる埋土は3層に大別でき、このうち第2層から遺物がまとまって出土した。

出土遺物 出土した遺物の保存状態は極めて悪く、甕など完形に近い個体が多数出土したにもかかわらず、同化できた遺物は第27図1~3に限られた。

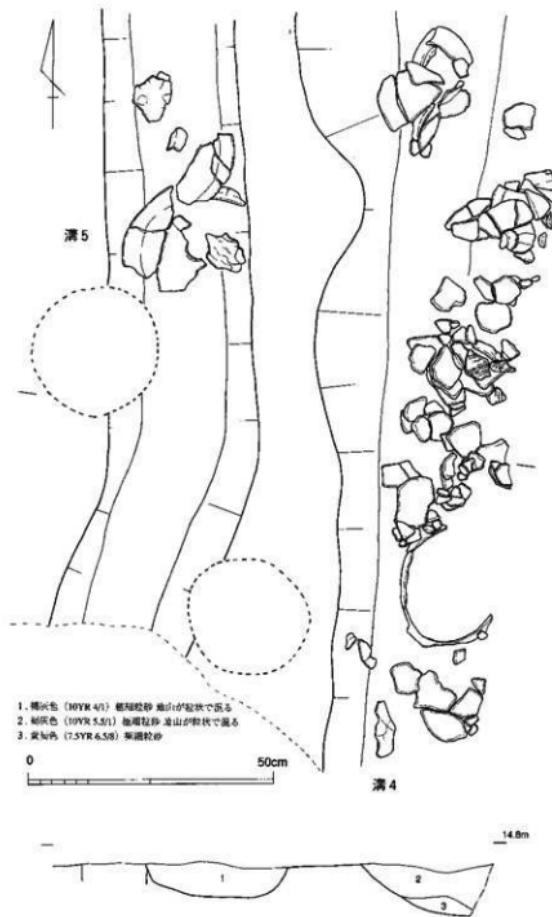
1は、長頸壺の頸部である。頸部最大径12.2cm、頸部長9cm前後をはかる。やや外方へ開く頸部から大きく外反した口縁を有する。口縁端部は欠損しており、形状は不明である。また、器壁の風化が著しく、内外面の調整は明確ではない。2は、小型の鉢体部である。復元した口径は、約14.4cmをはかる。内反気味に上方へ開く体部に屈曲した口縁を有する。1と同様に調整は不明である。3は、鉢底部で、底部径5cmをはかる。やや球胴に近い体部から明確に区分された底部がつく。底部



第27図 溝4・5出土遺物 (1:4)



第28図 溝4・5平面図 (1:40)



第29図 溝4・5 土器出土状況・断面図 (1: 10)

周辺に押圧痕を残す。弥生時代後期後半墳の所産と考えられる。

溝5 調査区北東部で検出した。溝は略南北方向に伸びるが、東向きに緩やかな弧を描くが、その両端は攪乱により削平されているため明確ではない。溝上面も削平が著しく本来の規模は明確ではないが、検出面における溝の幅は30cm前後、深さは5~7cmをはかる。溝5は、平面形状の特徴からみて、第3次調査区で検出した溝群と同様に、雨水等の排水目的に掘削された可能

性が考えられる。なお、埋土中から第27図4の高坏坏部が出土した。口径は約24cmをはかり、上縁部が大きく外反する皿形の器形を呈する。脚部との接合には充填法が用いられている。弥生時代後期後半の様相を示す。

4. まとめ

今回の調査においても、堅穴住居や掘立柱建物など多数の遺構を検出した。また、弥生時代後期初頭の堅穴住居や古墳時代前期の土坑、平安時代前期の掘立柱建物など、第3次調査区では確認されなかった時期の遺構を検出するなど多くの成果を得ることができた。以下、主たる三つの成果について述べることにしたい。

(1) 弥生時代後期から終末期の集落

今回、検出した遺構の多くは弥生時代後期から終末期の時期のもので、第3次調査区から集落の広がりを確認することになった。しかし、当調査区で検出した弥生時代後期の掘立柱建物の多くは10m²程度と小形で、生活に十分耐える規模・構造であるとは言いにくく、第3・4次調査区の建物に比べると対照的である。また、当該調査区では南部から西部にかけて土坑等が検出されるが、柱穴は北部から東部に集中するなど、遺構の分布に偏在性が認められ、さらに西方の原田遺跡第1次調査区では、該期の遺構が次第に稀薄になる傾向があることから、当該調査地が弥生時代後期の集落中核の外周部分にあたる可能性が想定できる。なお、土坑5は当該集落の廃絶時期をしめす可能性があり注目される。

(2) 弥生時代後期初頭の堅穴住居

曾根遺跡における調査で弥生時代後期初頭の堅穴住居が検出されたのは、今回がはじめての例となる。これまで、第1次調査区で中期末から後期初頭頃とされる土坑が検出されたことで、曾根遺跡における弥生時代後期の集落が中期末に形成することが推定されてきたが、堅穴住居の検出によりその可能性はより確実になりつつある。その一方で、中期前半以前に遡る可能性をもった遺物が第4次調査土坑3や当調査区土坑1から出土しており、これに後期以降における密集する集落の展開と、その周辺における開発を視野に入れた場合、中期段階の遺構群が後期以降の集落の展開により削平された可能性も残されている。よって、集落の形成時期については今後の調査に委ねる部分が多いものの、後期から終末期の遺構が主要となる曾根遺跡にあって、先行する後期初頭の住居は弥生集落の展開を考える上で重要な位置を占めるものと言えよう。

(3) 平安時代前期の掘立柱建物

当調査区で検出した平安時代前期の建物7は、位置を変えずに建て替えを行うという特異な状況が確認された。このような状況は、当該期の一般的な建て替えにはみられず、この建物が建て替えに際して外部から一定の規制を受けた可能性が考えられる。一方、平安前期における掘立柱建物は、当調査区からはやや離れた丘陵中央付近の第1次調査区と第5次調査区で確認されている。これらの建物は大型建物群として、官衙もしくは領主居館に推定されている。当調査区で検

出した建物7の主軸方向は大型建物群と共に、また出土した灰釉陶器も黒竈14号窯段階のものであることから、ほぼ同時期の所産といえる。しかし、建物7は大型建物群からは離れており、その一部になるとは考えにくい。これらの状況をあわせて考えると、この建物が大型建物群と何等かの関係、おそらくは大型建物群の付属施設となる可能性が見做せる。また、大型建物群からは離れた位置にある建物7にまで主軸方向に共通性が見られることは、丘陵一帯に大型建物群を基準とする方格地割、またはこれを志向する計画的な区画整理が実行された可能性を想定し得る。

この問題については今後の調査の進展と資料の蓄積をまつ必要があるが、関連遺構の検討がなされたならば、大型建物群の性格やその周辺の景観を復元する上で、さらには周辺部における条里地割の施行時期を考える上でも重要な手がかりとなろう。

以上、分布図上における曾根遺跡は、舌状丘陵という限定された空間に立地する小規模な遺跡であるが、弥生時代から鎌倉時代にいたるそれぞれの時代を通じて多彩な内容をもって展開することが、今回得られた成果からも伺えよう。

第三章 穂積遺跡第21次調査

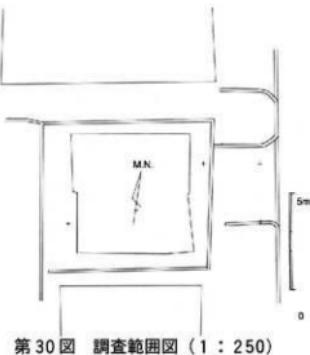
1. 調査の経緯

当該調査地は服部南町3丁目40に所在する。個人住宅が併設された共同住宅の建設に伴って試掘調査を行なったところ、良好な遺物包含層と遺構の存在が確認されたので本調査実施の運びとなった。発掘調査の費用負担は、個人住宅部分の占有面積を全体延床面積から按分し、その比率によって個人部分を国庫補助金から、共同住宅部分を事業主が負担することとなった。なお、調査対象面積は安全を考慮して51.25 m²に設定され、掘削は残土を場内で処分するため、反転して行なう運びとなった。

2. 調査の成果

(1) 基本層序

調査地周辺は千里丘陵の南側斜面下に形成された肥沃な沖積地で、天竺川の氾濫原に接し、膨大な洪水堆積物を内包している。近代に大規模な開発がなされるまでながらく低湿な環境に



第30図 調査範囲図 (1 : 250)



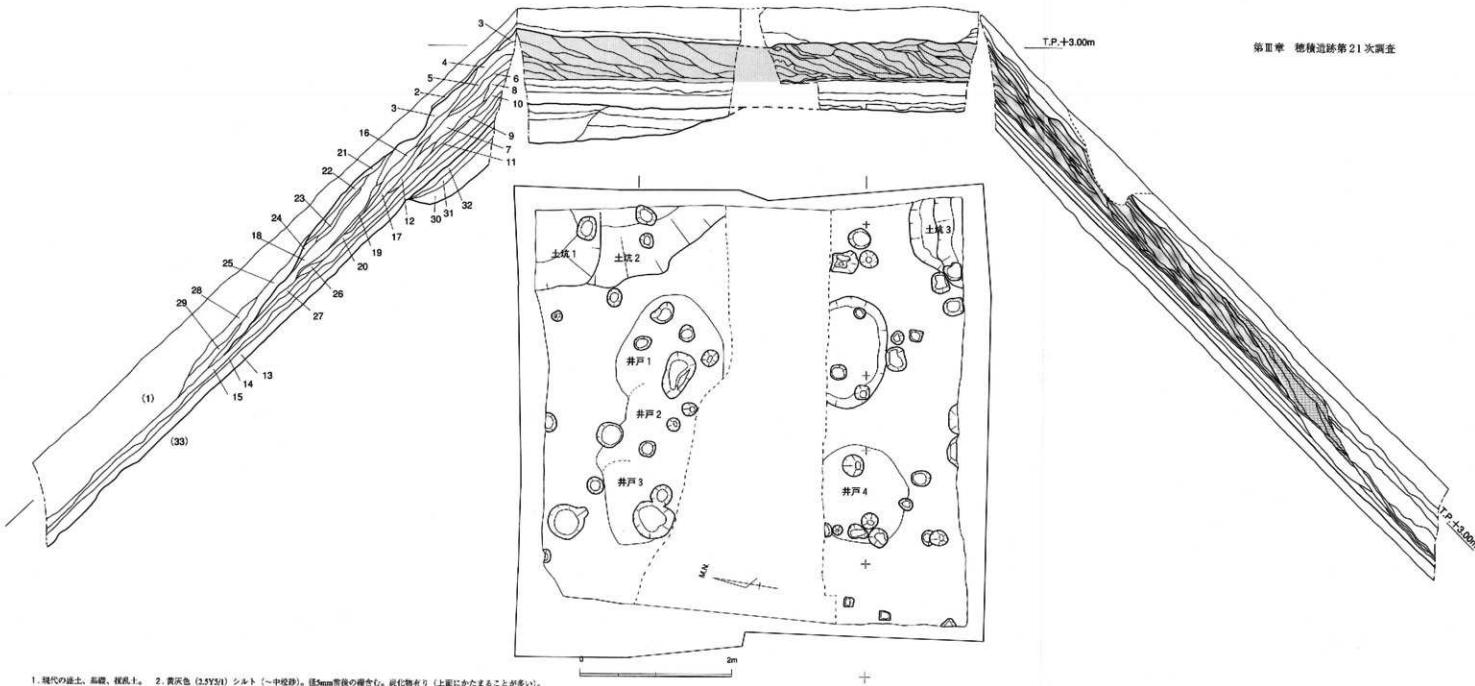
第31図 調査地位置図 (1 : 5000)

おかれた地域である。したがって近代以降の盛土を除いた堆積層は、その上半部が洪流水堆積物のシルトと粗粒砂で構成され（大半は互層構造）、水田耕作に伴って各々が攪拌された状態で検出される。これらの堆積層は耕作土であるがゆえに、またシルト（粘土）と粗粒砂の互層構造であるため、水分が比較的長く滞留した結果として鉄分の沈着が非常に顕著に見られ、全体に黄褐色系の土色を呈する。堆積層の下半部は、粘性の高い粘土（～シルト）で構成され、灰色～緑灰色系の土色を呈する。比較的長期にわたる止水堆積あるいは後背湿地にあたるような堆積環境におかれていたようである。しかし、その中でも数回の耕作が行なわれていたようで、足跡による層序の搅乱、具体的には洪流水砂層の下層への踏み込みの痕跡が顕著に見られた。また、耕作当時は有機分を多量に含有していたと見られ、現状でも淡い褐灰色～暗灰色系を呈する部分を観察することができる。この耕作行為は平安後期の遺物包含層（暗灰～暗褐色系細粒砂～シルト）をも耕作土とし、その痕跡は遺構が展開する堆積層の上面にまで及ぶ。平面的に精査すると不定形のもの（人間？）と偶蹄類の足跡が規則的に検出されたことから、断定はできないが周辺での知見を勘案して最も遡ても平安末の開発によるものと判断しておきたい。なお、今回の調査区は穂積村「圓い堤」の推定地に該当しており、下半部の水田耕作層を除いて前述してきた周辺の基本層序とは異なる堆積物が検出されているが、これらについては後節で詳述する。また、遺構面を形成するベース層は灰白色シルト及び、その直下の灰白～灰色粗粒砂層であるが、粗粒砂層からの湧水が著しく、これ以下の堆積層に関しては未調査である。

(2) 検出した遺構

検出した遺構群は、各々遺物包含層中あるいは上面からの構築がなされたものと考えられるが、湧水の影響や土色が酷似していたため、最終的にはベース層上面で平面プランを確定せざるを得なかった。したがって、個別の遺構の深度はその上部が若干削平された数値を示していくことを断わっておく。各遺構の構築時期については概ね平安後期に収まるが、当該調査地は遺跡内の古代～中世集落の中心からは若干距離があり、どちらかというと集落の南側縁辺部にあたるものと推定された。したがって遺構群も検出状況は比較的散漫で井戸やピットを中心となり、屋敷地を復元するには至らなかった。一方、調査区内では穂積村「圓い堤」に合致する盛土構築物が中世水田遺構面の直上から検出されており、集落の解体、移動と水田開発の動向を考察する貴重な資料となるであろう。以下に検出された遺構のうち主要なものについてその概要を記す。

ピット 検出されたピットは総数約50基で、調査区内各所に分散している。掘立柱建物の柱穴に該当する可能性のあるものはほとんどなく、平面プラン、断面形状ともにばらつきが激しい。ただし、一部に列をなすものなどがあることから、今回の調査範囲内では明確にはできなかつた建物が存在していた可能性はまったくないわけではない。また、ピットの埋土は暗褐色系のもの以外に灰白色系で砂質のものがある。これらは掘形が一辺約10cmの正方形で水田耕作に伴う構築物の痕跡であろうと考えられる。



1. 現代の地土、基礎、被覆土。 2. 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト (～中砂)。径5mm前後の礫含む。泥化物あり (上面にかたまることが多い)。
3. 開拓黄土 (2.5Y5/2) 中砂、径5mm前後の礫多く含む。灰白色 (2.5Y7/2) シルトブロック多く含む。 4. 灰青色 (2.5Y6/2) 中砂、径10mm前後の礫若干含む。灰白色 (2.5Y7/2) シルトブロック多く含む。
5. 開拓黄土 (2.5Y5/2) 中砂、径5mm前後の礫若干含む。灰白色 (2.5Y7/2) シルトブロック多く含む。 6. 灰色 (D6/0) 中砂、粒分混在り。径5mm前後の礫若干含む。 7. 5層と5層の混合。
8. 灰色 (D6/0) 中砂 (～粗粒砂)。灰白色 (2.5Y7/2) 粗粒砂 (～粗粒砂) ブロック含む。粒分混在。径10mm前後の礫含む。 9. 10層と13層のブロック混合。10層の割合が大きい。
10. 灰白色 (2.5Y7/2) 粗粒砂 (～粗粒砂)。13層ブロック少數含む。まれに径5～10mmの礫多く含む。粒分若干比。 11. 13層と同様、粒分少い。 12. 10層と13層のブロック混合。
13. 深色 (7Y4/3) シルトブロック混じり粗粒。植物遺体多く含む。径5～10mmの礫多く含む。底上部では河岸粘土～シルトを1cmの厚さで均一にたすき。絆二。
14. 深色 (7Y4/3) シルトブロック混じり粗粒。植物遺体多く含む。径3～5mmの小礫多く含む。水生植物茎。
15. 深灰色 (7.5Y4/2) シルト混じり粗粒。全層に裂隙。マンゴー葉比較的河町時代の木臼ベース、牛の足跡、縞雲石有。底部に灰白色 (N6/0) 粗粒が入る。 16. く潭と同様。シルトブロックが若干多い。 17. 8層と同様。
18. 3層と同様、灰化物多い。細かいシルトブロック多い。 19. 6層と同様。 20. 1, 0層と同様。北東地で、上部に鉛分混在。
21. 3層と同様、シルトブロックより多く (50%) 含む。 22. 深色 (7Y4/2) 細粒砂 (～粗粒砂)。粒分混在。径1mm前後の礫多く含む。 23. 8層と同様。 24. 3層と同様。シルトブロックより多く含む。
25. 灰色 (D6/0) 粗粒砂、細粒砂 (～粗粒砂)と径5～10mmの礫含む。均一。 26. 12層と同様。シルトブロックなし。 27. 灰青灰色 (2.5Y6/2) シルト (～粗粒砂)。
28. 黑褐色 (2.5Y3/2) 粗粒砂 (～粗粒砂)。径1～2mmの礫含む。オリーブ色 (5Y6/1) 粗粒砂 (～粗粒砂)、ブロック若干 (3%) 含む。
29. 黑青灰色 (5B4/1) 粗粒砂 (～粗粒砂)。径2～3mmの礫含む。青灰色 (5B7/1) シルトブロック混入。 30. 灰青色 (2.5Y5/1) シルト (～粗粒砂)。灰化物若干含む。径1～3mmの礫若干含む。
31. 灰色 (5Y4/1) 粗粒砂 (～粘土)。灰化物若干含む。地盤強い。 32. 深色 (5Y4/1) 粗粒砂 (～粗粒砂)、シルト (～粘土)。ブロック40%程度含む。径1～10mmの礫、明暗灰褐色 (10GY7/1) シルトブロック若干含む。泥化物若干含む。
33. 上部は灰白色 (5Y6/1)、下部は明暗灰褐色 (7.5GY7/1) 粗粒砂 (～シルト)。上部は鉛分、マンガン沈着。ベース層。

第32図 調査区平面・断面図 (1 : 50)

土坑 調査区内ではごく浅い落ち込み状の遺構を除いて、3基の土坑が検出された。土坑1は一辺約1m程度の不定な隅丸方形をなすものと推定され、遺存した深さ約50cm程度を測る掘り鉢状の形状である。調査区内ではそのおよそ4分の1程度が検出されたにすぎないが、埋土の中層（暗灰黄～暗灰色系のシルト～粘土）から瓦器碗をはじめとする平安後期の良好な一括遺物が出土した。出土状況や日常雑器が多く含まれることなどから、廃棄土坑としての性格を考えておきたい。土坑2は土坑1との重複関係にあり、土坑1に先行して掘削されたものである。土坑3も土坑1と同時期のピットと重複関係にあり、ピットに先行して掘削されている。土坑2・3ともに一括性の高い遺物は出土しておらず、その性格は不明である。3基の土坑はすべて調査区東壁に沿って検出されている。

井戸 今回の調査区内では井戸が4基検出された。そのうち3基では井筒に直径約30～40cmを測る曲物（2段組）を利用しており、井戸1では縦木枠組（四隅柱横棧組構造）の井戸枠を備え、井筒として曲物を5段組にしている。最上段の木枠から井筒最下部までは約2mを測るが、木枠自体の遺存状態が非常に悪く、使用時の深度は復元できなかった。井戸1～3は掘形が重複していて、1～3の順に掘削されたことが確認された。残念ながら調査区の壁面が崩落し、危険回避のために井戸1～3ではこれ以上の詳細なデータが採取できなかったが、井戸4では基本的な資料を得ることができたので報告する。井筒に使用された曲物は、上下2段に分割され、上段は直径約40cm、高さ約32cmの側板に高さ約10cmの帯板が外側上下に付加されている。帯板は側板の上下に3cm程度はみ出して付加されているので、上段の高さは約38cmを測る。下段は直径約36cm、高さ約30cmの側板のみで構成され、上段との重なりはほとんど見られなかった。掘形は検出面で直径約1mを測るが、井筒上段の下部付近で段掘り状に幅を減じ、井筒下段の最下部付近で井筒に密着する。掘形埋土は井筒上端部までが埋没過程での流入土や埋め戻し土で構成され、井筒上端部と同レベルからは井戸構築時の埋め戻し土が整然と堆積していた。

堤状遺構 平安後期の遺構面直上にはシルトブロック混じりの灰色系を呈する耕作土が3層程度水平に堆積している。これらの耕作土上部からは試掘時にも「へそ皿」などが出土しており、平安末～中世後期まで周辺が水田化していたことがわかる。耕作土の水平堆積物の上部には、大きなブロック単位での盛り土が見られ、東西方向では右上から左下へ、南北方向では左上から右下への傾斜が認められる。盛り土ブロックの1単位は比較的粗い砂粒で構成され、部分的にシルトブロックを含むもの、マンガンの斑状沈着が見られるものがあるが、全体としては均質で脆弱な土砂である。出土遺物はほとんど見当たらないが、堆積状況から考えて短期間に構築されたものであろう。南北方向の断面では盛り土の傾斜が全く変化を見せないのでに対して、東西方向の断面を観察すると調査区の東端付近で、やや右下がりの堆積構造に変化しつつあるのが看取される。その部分を中心にして盛り土の傾斜が左右均等に配分されたと仮定すれば、これらの盛り土は東西方向において上端面の幅約3m、下端部の幅約6mを測る、堤状の構築物で

あるということができる。先述したように当該調査地点はいわゆる積木村の「圓い堤」推定地に合致しており、検出された堤状遺構がその「圓い堤」である蓋然性は極めて高い。盛り土の最上部では、近代のものと考えられる陶磁器破片なども若干含まれ、第二次世界大戦後まで補修を行なないながら使用を続けたという言い伝えとも齟齬をきたさない。ただし、その主たる使用目的が洪水の回避であったとするには、盛り土を構成する土砂が脆弱すぎるようにも考えられ、今後の発掘調査成果の増加と、いまだ皆無である文献資料等の蓄積を待って検証していく必要があろう。

(3) 出土遺物

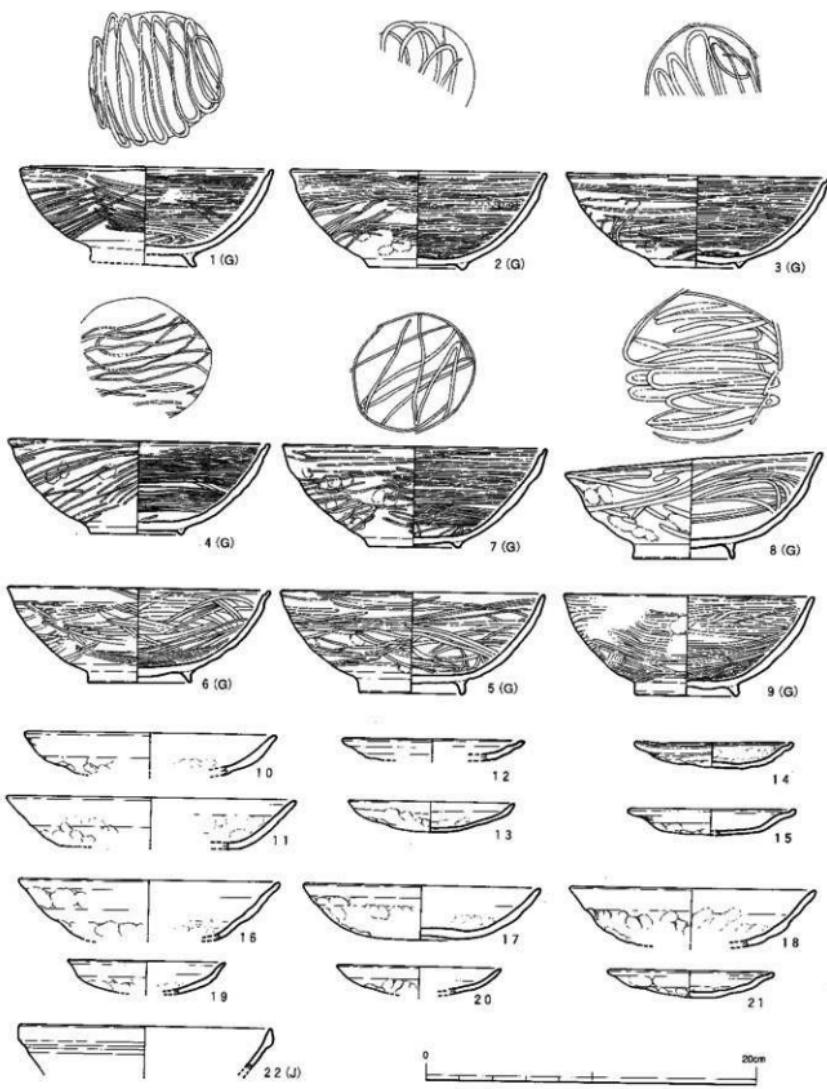
今回の調査では土坑1と井戸群からまとまった遺物が出土した。特に土坑1の遺物は、括りが高く、周辺の集落変遷を追究する上で重要な資料となり得ることからこれを中心に報告する。

第33図に図示したのは土坑1の出土遺物である。1~9は土坑1の中・下層から出土した瓦器碗である。各個体ともに体部外面に分割ヘラミガキを施し、その範囲は高台付近にまで及んでいるが、ヘラケズリの痕跡は認められない。また、口縁から体部内面にかけてのヘラミガキも圓錐状に緻密に施されたものが多い。4・7・8には小さな円錐形の剥離痕が多く見られる。概ね、1~5が楠葉型、6~9が和泉型に該当するものであろうと考えられるが、形態的には播磨期に当たるためか、各型式の特徴が混在しているように見受けられる。分類の基準としては、口縁部が外反することや口縁内面に沈線を施すといった事象を尊重しつつも、該期の和泉型においては見込みのヘラミガキが内面の圓錐より先行すること、高台の形状が逆台形で一定の高さが保持されていることなどを最大限重視したものであることを断わっておく。時期的には両式ともにⅠ期末~Ⅱ期初頭の所産と考えられるが、1・6については若干古い様相が認められ、Ⅰ~Ⅱ期まで遡る可能性がある。また、残存率が悪く図示できなかつたが、黒色土器（B類・碗）も共作している。

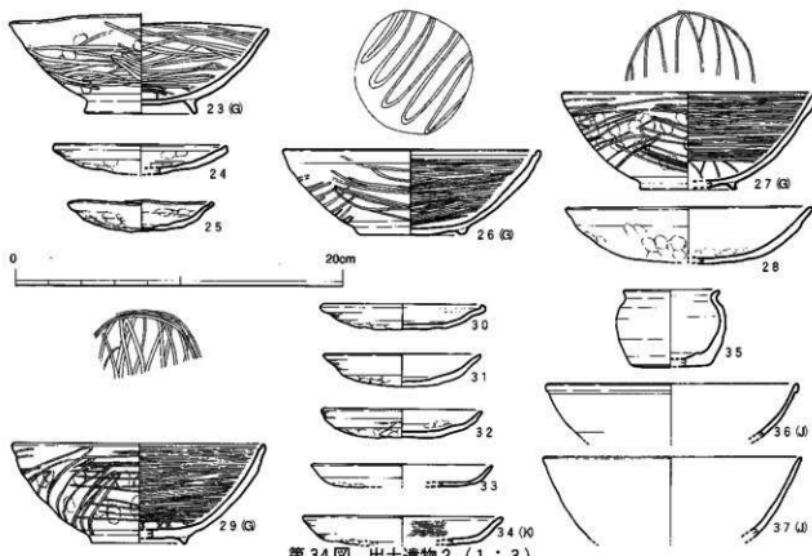
10~21は土師皿である。10~13は土坑1の上層から、それ以外は中・下層からの出土遺物である。在地産と見られる土師皿には大小があるが、体部下半をユビオサエし、外面調整は1段ナデ、内面を不整方向のナデで仕上げるものが大半である。色調は概ね淡灰褐色を呈する。一方、洛外産の系統では14・15がいわゆる「ての字」状口縁を持つ器種で、色調は乳白色~灰褐色を呈する。器壁は約3mmを測り、比較的厚く、口径は10cm前後である。

22は白磁碗である。口縁端部にⅠ縁を持つ、典型的なⅣ-1類で、釉色はやや黄色味を帯びた白色を呈する。時期的には瓦器碗や土師皿総体の示す年代と同時期と考えて大過なかろう。

第34図に図示したのは、井戸群から出土した遺物である。23~25は井戸1、26~28は井戸2、29~37は井戸4からそれぞれ出土した。35は土師質の小壺である。36は白磁碗で小さなⅠ縁を持ち、Ⅱ類に比定されるものである。釉色はやや黄色味を帯びた白色を呈する。37も白磁碗であるが、口縁端部を丸くおさめた・類に比定されるもので、釉色は灰白色を呈する。これらの遺物群も土坑1とほぼ同時期とみなしてもよい資料である。



第33図 出土遺物1 (1:3)



第34図 出土遺物2 (1:3)

3.まとめ

今回の調査で検出された遺構群は、平安後期の屋敷地の外郭に当たる部分であることが推定される。廐棄土坑や短時間に作り替えられた井戸群の存在から、近隣に主屋の存在する可能性を示唆することができると同時に、土器型式に見られる時間軸からも比較的安定した生活域としての位置づけができるよう。しかしながら、今回の調査では様々な制約からその全容を知ることができなかった。また、既往の調査では遺跡範囲内の平安後期を初現として展開する集落に関して、面的な広がりを持って確認された事例はほとんどない。周辺地域での条里型水田の施行開始時期の限定と集落変遷の過程を具体的に追究するには、未だ資料的な限界があることから、今後の調査成果の充足が待たれる。

一方、今回の調査で特筆すべきは、周辺地域では初めて穂積村「囲い堤」であろうと推定される堤状遺構を検出したことである。残念ながら限られた調査面積の中では、東側の傾斜をわずかに観察し得たのみであったが、時期的には室町以降の築造であることが少なくとも当該調査地点では確認されたので、「囲い堤」の全容解明に向けた調査の足がかりになる貴重な資料が得られたことはまちがいない。

現状では、ほとんど観察することのできない「囲い堤」ではあるが、部分的な復元・保存なども視座に置きながら、今後の調査を進めていく必要があろう。

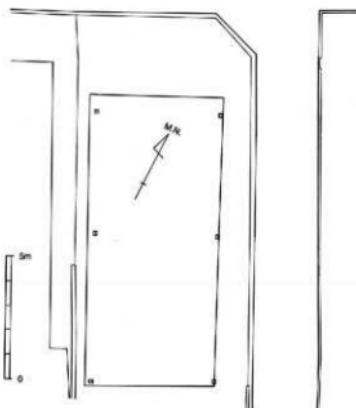
第IV章 岡町南遺跡第2次調査

1. 調査の経緯

当調査地点は岡町南2丁目1番17にあり、岡町南遺跡の範囲内にあったため、個人住宅建設にともない、試掘調査が行われた。その結果、当地に遺構が存在することが確認され、発掘調査が行われることとなった。調査期間は1997年3月4日から24日である。なお、廃土を置く場所がないため、調査区を南北に2分して調査を行った。調査面積は 107m^2 である。

2. 既往の調査

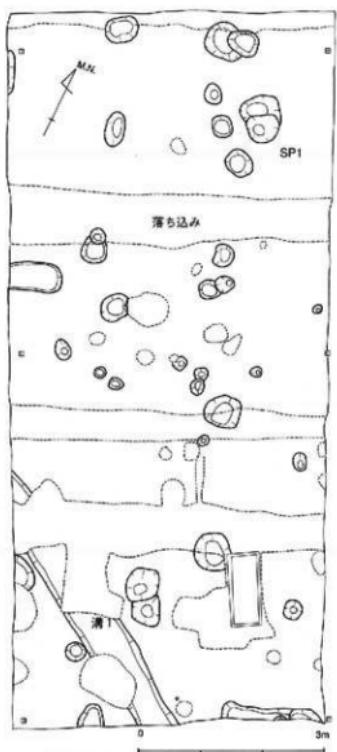
岡町南遺跡はこれまでに1回の調査が行われている。第1次調査地点は本調査地点の南100m余りの地点にある。そこでは、調査面積が狭いにも関わらず掘立柱建物3棟が検出された。出土遺物が少なかったものの、土器から古墳時代後期のものと考えられている。また、第2次世界大戦時の防空壕も見つかり、豊中の戦時の生活を知る上で貴重な資料をえたのである⁽¹⁾。



第35図 調査範囲図 (1:200)



第36図 調査地点位置図 (1:5000)



第37図 調査区平面・断面図 (1:80)

ら、須恵器片と土師器片が出土している。小破片が多くいたため、図示しえる個体は少なく2点にとどまる(第40図-3、4)。3は台付の壺の破片と考えられる。胴部最大径20.6cm・残存



第38図 溝1土師器出土状況

3. 調査成果

(1) 基本層序

当調査地点は通称豊中台地の南部、標高11.5mの低位段丘上にあり、北から南にむかってゆるやかに下る場所に立地する。こうした低位段丘上では、後世の土の堆積が多くないことが一般的であるが、ここではそれに加え近・現代の開発によって削土が行われたようで、現地表下数cmか10cmあまりの現代の盛り土直下というきわめて浅いところから遺構面を検出した。遺構面を構成する地層は、洪積層を多分に含む暗褐色系のシルトから構成される。

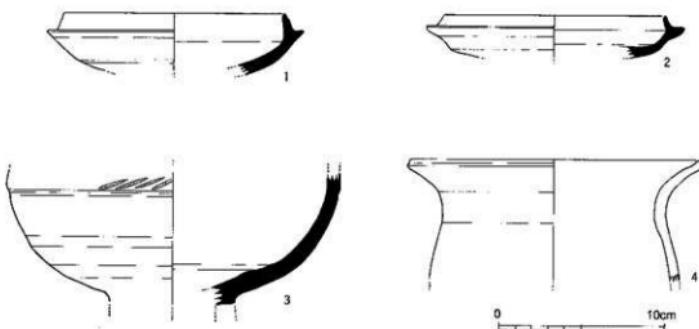
(2) 検出した遺構と遺物

現代の盛り土直下で遺構面を検出した。遺構面は以前の建築物の基礎等で、搅乱されている箇所もあったが、溝1条・ピット30基余を検出する事ができた。以下に主な遺構と遺物について述べることとする。

溝1 調査区の南西隅を西から東へ走る幅60~70cmの溝である。残存する深さは約15cmである。溝底のレベルは西から東にむかって緩やかに下っている。溝か



第39図 SP1断面



第40図 出土遺物 (1:3)

高6.0cmである。腹部中央に沈線を一条めぐらし、その上に烈点文を施す。壺部の底部下半にヘラ削りをほどこす。それ以外は丁寧にナデ調整が施される。脚部は失われているが、壺部底部にわずかにその痕跡を残しており、それをみれば、透かしを有していることもわかる。

4は土師器の壺であろう。口縁部径18.0cm・残存高7.5cmを計る。内外面ともに風化が激しく、調整はみづらいが、ハケ調整が施されている。

ピット ピットは調査区内の各所から30基余りを検出している。直径30cmをこえて深さも30cmを超え、断面に柱痕を観察できるものも存在する。しかし、調査面積が限られたこともあり、明確な建物跡を検出することはできなかった。

なお、こうしたピットからは少量の須恵器片が出土しているが、図示しえるものは皆無であった。搅乱中からは図40-1・2が出土している。1・2とともに須恵器の坏身の破片である。口縁部径13.5cm・残存高2.5~3.5cm。立ち上がり高は0.8~1.2cmを計る。

遺構出土の遺物は少ないため、遺構の時期は特定しがたいが、出土している土器はすべて古墳時代後期に属するものであることから考えて、遺構の多くも当該期に属するものと考えられる。

4.まとめ

以上、記述してきたとおり、古墳時代後期と考えられる溝とピット群を検出した。ピット群の存在は、当地に掘立柱建物を中心とした集落が存在したことを示すものである。昨年度調査された1次調査でもほぼ同時期と考えられる掘立柱建物が3棟も検出されており、本調査で見つかった遺構との関係が注目されよう。もし、2つの調査でみつかった建物が同一の集落に属するものとするならば、この間町南にはきわめて規模の大きい集落が存在することになる。集落の規模の問題に答えうる資料はいまのところ存在しないが、今回のような調査を積み重ねていくことによ

り、問題の解決を計ることができるであろう。遺構は本調査区外にも広がっていることは確実で、周辺の開発にはじゅうぶん注意を払う必要があるろう。

注)

- (1) 新本真之 1997 「岡町南遺跡第1次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』平成7(1995)年度 豊中市教育委員会。

図 版



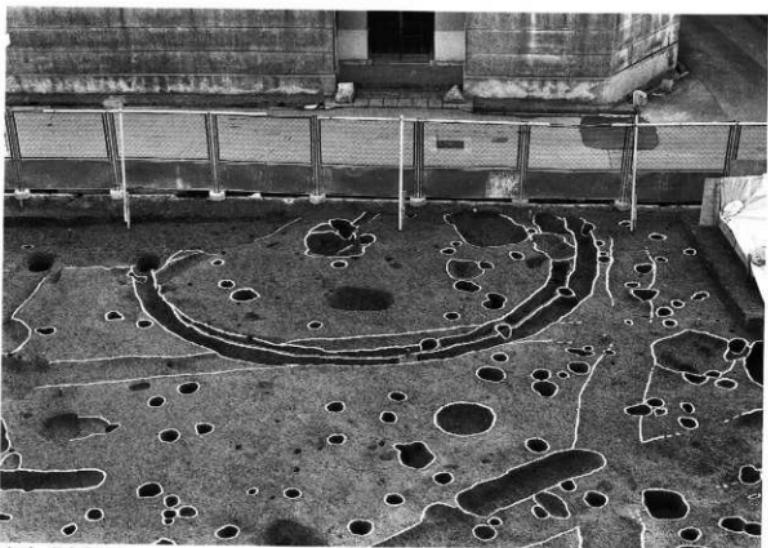
(1) 調査区全景（北から）



(2) 溝4土器出土状況



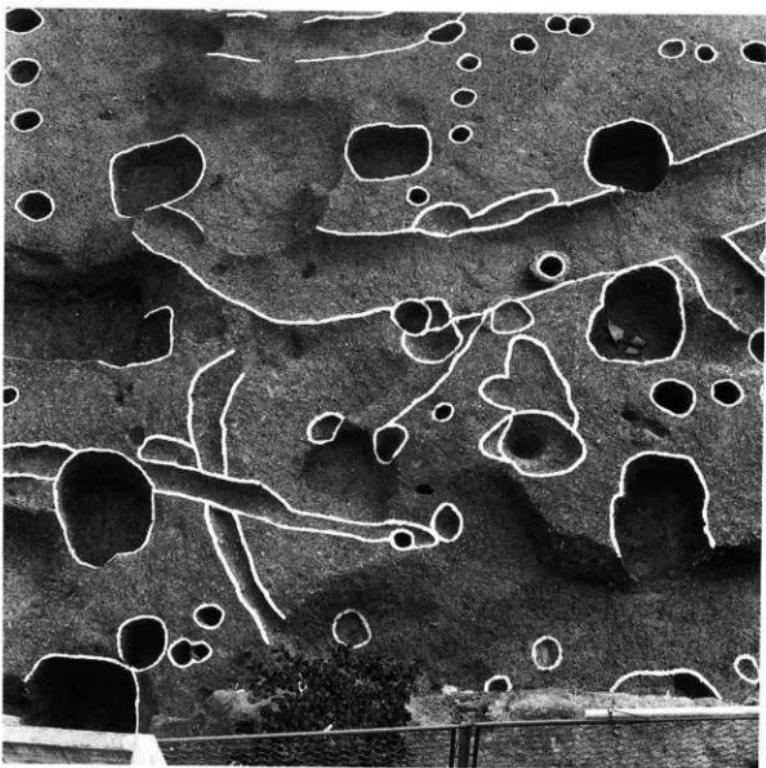
(3) 溝5土器出土状況



(1) 壴穴住居1



(2) 周溝2土器出土状況



(1) 建物 7



(2) 建物 7 柱穴 2



(1) 土坑3土器出土狀況



(2) 土坑3断面



1



2



3



4



5

1 : 第10図2

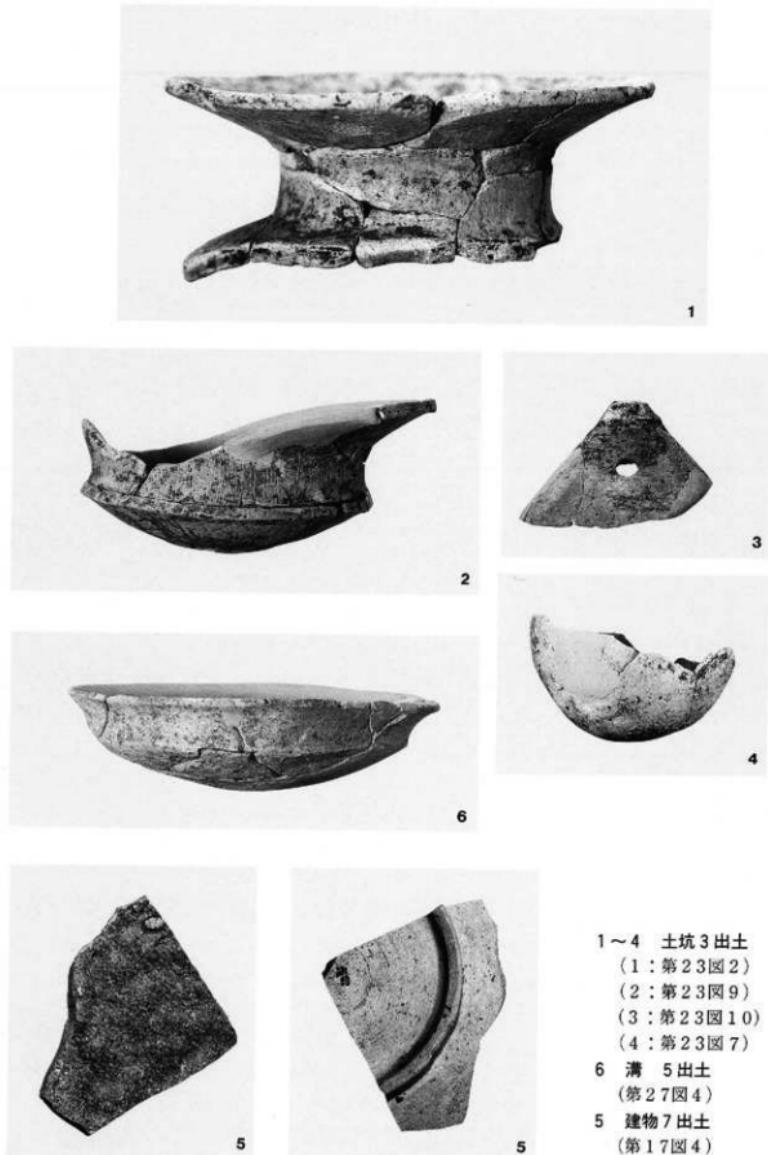
2 : 第10図1

3 : 第10図3

4 : 第10図6

5 : 第10図4

(1) 周溝2出土遺物



1～4 土坑3出土
 (1:第23図2)
 (2:第23図9)
 (3:第23図10)
 (4:第23図7)

6 溝5出土
 (第27図4)

5 建物7出土
 (第17図4)

図版 7 穂積遺跡第21次調査



(1) 調査区北半部遺構完掘状況



(2) 調査区南半部遺構完掘状況



(1) 調査区北壁（匂い堤東西）断面



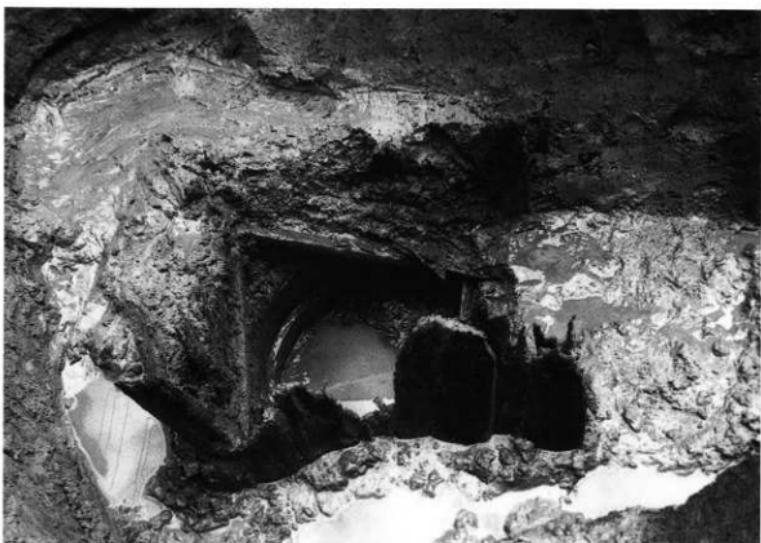
(2) 調査区東壁（匂い堤南北）断面



(1) 土坑1土器出土状況（北側）



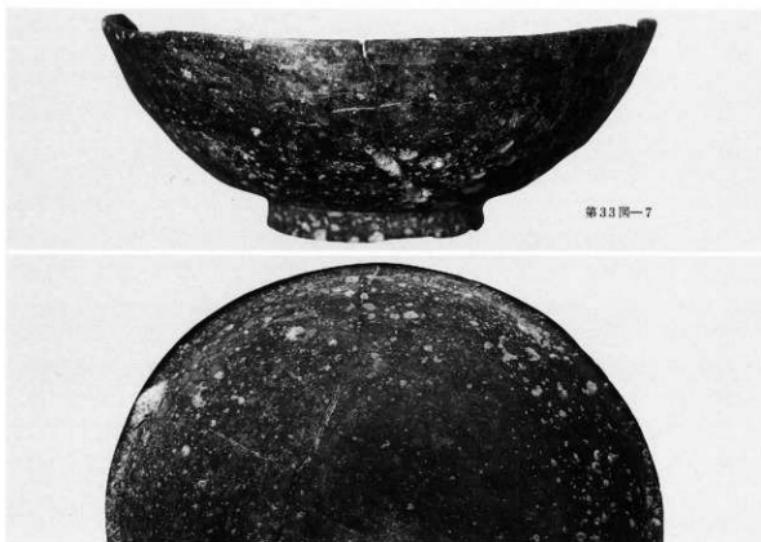
(2) 土坑1土器出土状況（南側）



(1) 井戸1検出状況



(2) 井戸4検出状況



第33圖一7

(1) 土坑1出土瓦器碗



第33圖一6

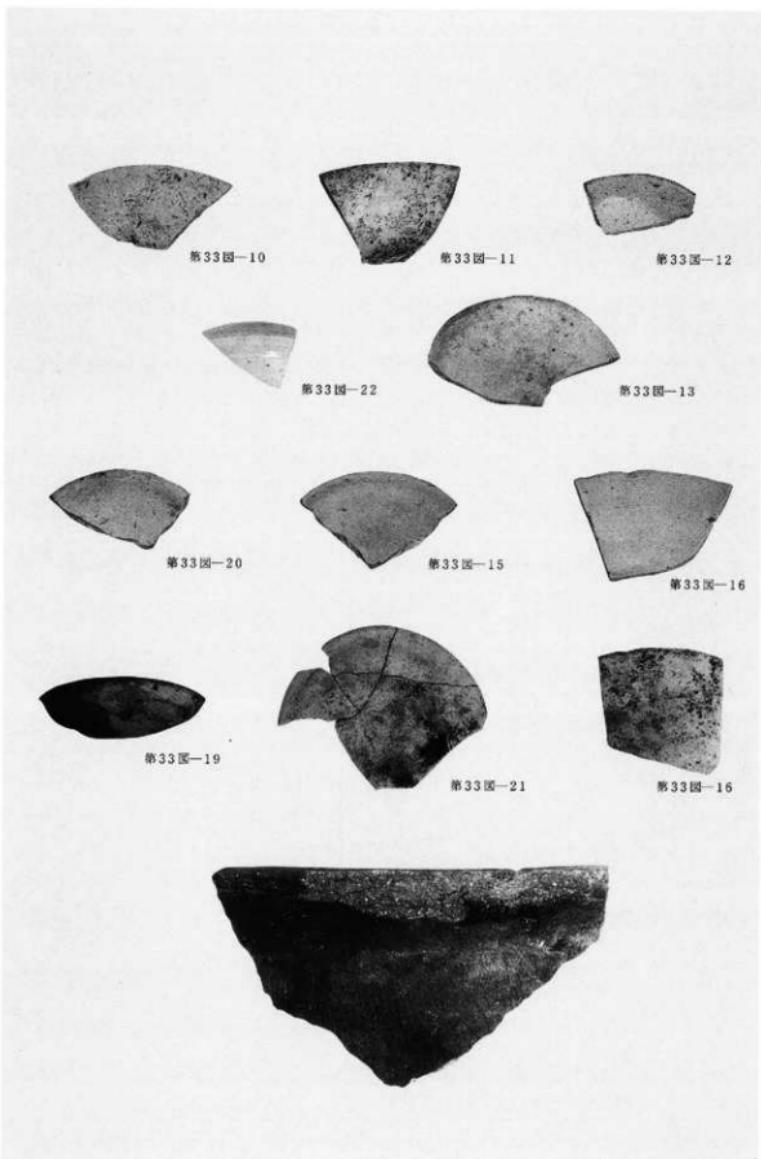
(2) 土坑1出土瓦器碗



(1) 土坑1出土瓦器椀



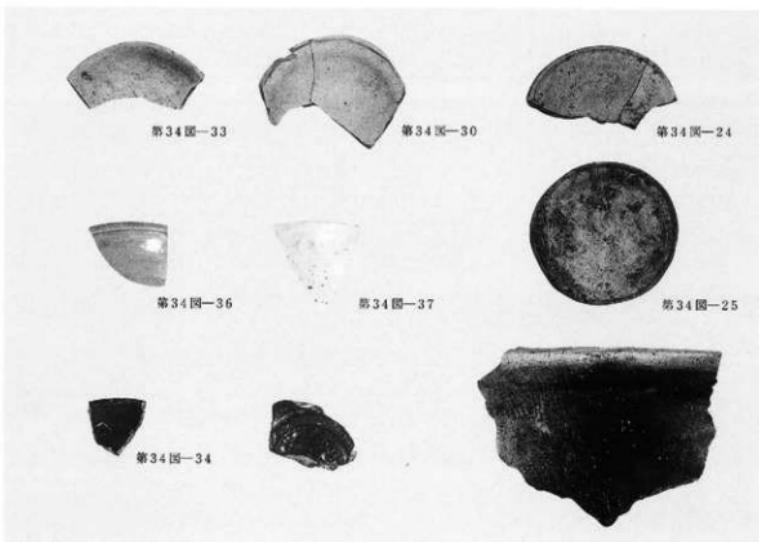
(2) 土坑1出土瓦器椀



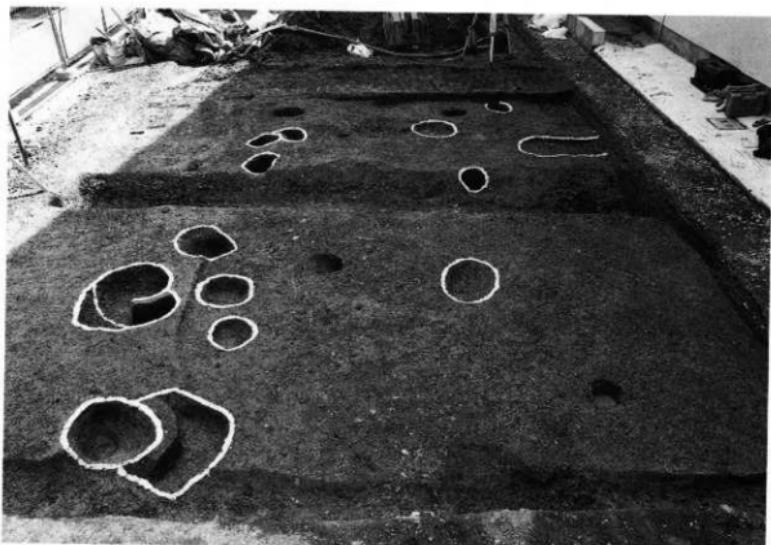
(1) 土坑1出土遺物



(1) 井戸1・2出土瓦器碗



(2) 井戸1・4出土遺物



(1) 北区全景（北から）



(2) 南区全景（北から）

豊中市文化財調査報告書第42集
豊中市埋蔵文化財発掘調査概要

平成9年（1997年）度

発行 豊中市教育委員会

豊中市中核塚3丁目1-1

平成10年（1998年）3月31日

印刷 大和写真工業株式会社
